

森林と 時間

森をめぐる
地域の社会史

山本伸幸
編

新泉社



写真
カバー表 奥山洋一郎
カバー裏 志賀和人
本扉 竹本太郎

ブックデザイン 北田雄一郎

目次

序章

森林の時間と人の時間

山本伸幸

007

- 1 森林、人、地域それぞれの時間スケール——本書の課題……008
- 2 ライフコース分析——方法と先行研究……010
- 3 個人的時間と社会的時間……013
- 4 歴史の四層構造……016
- 5 本書の構成……018

第1章

山造りに出会った人びと

三木敦朗

023

——島崎洋路と森林塾

- 1 ふだん着の移住先……024
- 2 島崎洋路の引力……025
- 3 森林塾通信の二〇年……031
- 4 人工林のステージと人びと……041

第2章

山村社会の継承と女性のライフコース

山本美穂

047

——栃木県の山村の二〇〇年にみる女性たちの歩み

- 1 「家」と女性……048
- 2 ある山村の二〇〇年と世代……049

第3章

山と川と共に暮らす 集落と住民の生活史

竹本太郎・佐藤周平・松村 菫

075

- 3 団塊世代——山村レストランを拓いた女性たち…… 053
- 4 「均等法」以後——林業職に就いた女性たちの歩み…… 061
- 5 「林業女子」——活躍の舞台として地域を再発見した女性たち…… 065
- 6 山村・森林・林業・林産業と女性たちのこれから…… 069
- 1 二〇二〇年四月の集落合併——動き出した「不動」…… 076
- 2 集落財政——「割元」という仕組み…… 080
- 3 屋号、家屋、家族——「建物台帳」の分析から…… 085
- 4 住民のライフコース——三世代の歩み…… 091
- 5 少子高齢化に挑む集落——二〇三〇年に人口一五〇人(六〇世帯)…… 102

第4章

福島県浜通りの近代と森林・断章

山本伸幸

107

- 1 二〇二三年春、JR木戸駅前…… 108
- 2 福島県双葉郡木戸村…… 109
- 3 石川林業社長・石川浅次郎…… 113
- 4 木戸営林署長・誉田裕…… 122
- 5 福島県浜通りの近代と森林…… 131

第5章

紙・パルプ産業と地域持続性の懸隔

早船真智

137

- 王子製紙山林部の展開と現場作業組織の相互連関
- 1 紙・パルプ産業と森林…… 138
 - 2 王子製紙山林部・小林準一郎…… 140
 - 3 坂本木材・坂本竹次郎…… 153
 - 4 余 聞——地域へ押し寄せたパルプ材需要の波…… 162
 - 5 産業組織のあり方と森林の持続性…… 165

第6章

赤井学校の時代

奥山洋一郎

167

——ある地方大学にみる国産材供給整備の源流

- 1 学問をつなぐもの…… 168
- 2 赤井英夫の京都・島根・東京時代…… 169
- 3 赤井の鹿児島大学赴任…… 171
- 4 赤井・野村論争…… 174
- 5 赤井学校の誕生…… 180
- 6 「新流通・加工システム」「新生産システム」への道…… 185
- 7 赤井と山田——国産材供給システムの投影…… 188
- 8 赤井学校、その後…… 190
- 9 大学と社会——教員と学生の寸時の交わりから…… 193

——林政の変遷と天竜・富士南麓にみる地域実践

- 1 森林管理・林政における領域性と当事者性……198
- 2 日本林政の展開と官僚組織……200
- 3 二世紀日本林政の迷宮……207
- 4 天竜林業地にみる地域の当事者性と時間意識……212
- 5 富士南麓共有地と富士市有林・御殿場市財産区の現在……217
- 6 地域森林管理の領域性と官僚的当事者性の克服……226

終章

森林と人の関係を紡ぎ直し続けるために

——山本伸幸

231

- 1 本書の方法論的位置……232
- 2 森林と人の関係の継承……236
- 3 森林の歴史……238
- 4 近代社会・境界・日々の営み……241

編者あとがき……245

文献一覧……i

序章

森林の時間と
人の時間

山本伸幸



1 森林、人、地域それぞれの時間スケール——本書の課題

樹木の生命は数十年、時として数百年に及ぶ。そのため、森林と地域の関係を考えようとする
と、長期の時間スケールがどうしても不可欠となる。一方、人の寿命は長くても一〇〇年程度で
あり、統計上の生産年齢ならば一五歳から六五歳までの五〇年間、現代日本では何らかの就業に
ある期間は三〇〜四〇年間程度であることが多い。一人の人間の一生では抱えきることができな
い森林との関係の長期の時間スケールに、人びとはこれまでどのように対峙してきたのだろうか。
本書では、その答えを地域の歴史の中を探ろうとした。

一人の生涯の時間で足りないならば、子や孫などの次世代へと森林に対する思いや考え、仕組
みと技術を継承し、世代の連鎖の中で長期の時間を担保していく必要がある。しかし、現代社会
ではそうした個々人の気持ちのよりどころを探そうとしても、確固とした何かを見つけることは
なかなか難しい。

市場経済が広く浸透するなか、大量生産・大量消費社会はグローバルゼーションとまでいわれ
るようになった。近代社会が要請する階層間の社会的流動性は、人びとの暮らしに絶え間ない変
化をもたらし続けている。物的、人的の両面において、長期の時間を保証するような地域社会の
安定性はかつてのようには自明でなくなった。現代の資本制経済社会に必然的に生じる困難を何

とか乗り越えようと、不安定化した地域社会の中に、代替するさまざまな社会関係を新たに見つ
け、構築し、森林との関係を次世代へとつなぐ努力が多く地域でいまま続けられている。

二〇二四年現在、日本では、カーボンニュートラル（温室効果ガスの排出実質ゼロ）やSDGs
（持続可能な開発目標）の達成に向けて、木質資源や森林環境への期待、農山村地域の暮らしに関
心を寄せる若年世代の増加など、森林と地域との関係を新たに構築し直そうという動きがここ
こで見られる。一方で、農山村地域の高齢化、労働力不足、森林管理の不足等、これまであった
問題に画期的な解決策が見つかったわけではなく、森林への多くの人びとの好意的なまなざしも、
また、いつ向かい風へと転じるかわからない。

予断を許さない状況が今後も続くことは間違いない。とはいえ、一九六〇年代に木材輸入自由
化が始まって以来、日本において、これほど多くの人びとが森林へと関心を向けるのは久しぶり
のことである。この熱量をどうにか次の世代へと継承し、地域社会と森林のより良い関係の未来
像を描くことはできないだろうか。

未来像を描く一つの手がかりとして、本書ではライフコース分析を援用し、森林と地域社会の
関係について、人びとがこれまで模索してきた社会史の具体像の提示を試みた。歴史とは、古い
ものをただ愛でるだけの骨董趣味を指すものではない。不確実なこれからの道行きを照らす仄ほか
だが、しかし確かな光こそが歴史である。

各章に綴られた七つの物語は、そこに生きた人びとが地域の森林に刻んだ歴史であり、その痕
跡はわたしたちの道標ともなる。ややもすれば忘れてしまいそうになる過去の断片を丁寧

い集めることで、新たな歴史像を築く足元を少しでも固め、将来を見渡す一助となればと願う。

2 ライフコース分析——方法と先行研究^①

本書では、その方法的基礎としてライフコース分析を援用した。ライフコース分析はアメリカの家族社会学が、発達心理学の成果を採り入れるなかから案出された方法である^②。日本では一九八〇年代に研究が試みられるようになった。日本へのライフコース分析導入に重要な役割を果たした家族社会学者の森岡清美は、理論の提唱者であるアメリカの社会学者エルダーを引きつつ[Elder 1977]、ライフコースを「個人が年齢別の役割や出来事 (events) を経つつ辿る人生行路 (pathways)」と定義した[森岡ほか1996: 1]。

人はそれぞれの生涯にわたる人生行路において、ある時代に起こった出来事に偶然巡り合わせらる。ライフコース分析では、その巡り合わせたタイミングで、人がどの年齢段階であったかに注目する。例えば、同じ戦争に遭遇したとしても、赤ん坊と青年、あるいは高齢者ではその際の役割、立ち居振る舞いは異なっており、その差異が重要と考えるわけである。このタイミングと年齢段階をキーとして、個々人の私的経験と社会的出来事に結節点を見だし、そこから個人と社会それぞれの理解をより深めようというのがライフコース分析の基本的アイデアである。

ライフコース分析のキー概念の一つである「コーホート (cohort)」は、もともと人口学概念であり、「同時出生集団」とも訳される特定の出生年に基づく年齢グループを意味する。統計操

作可能なため、将来人口推計などに用いられる^③。ライフコース分析では、コーホート概念を世代と社会との関係把握に用いる。

戦争のような大きな社会的出来事に遭遇し、歴史の烙印を穿たれたある一定の年代層のコーホートは、単なる年齢階で区切られた統計的集団という意味合いを超え、「世代」とも読み替え可能な、同じ社会的経験を共有した社会的実態を有する集団として把握されると仮定する^④。そうすることで、「救いがたく多岐多様な資料を整理して社会的歴史的变化をあらわにする道が開」け^⑤ [森岡1993: 225]。

現在ではアメリカ社会学会を中心に、ライフコース分析に関する浩瀚なハンドブックも編纂され、多くの分析ツールや概念が提案されている [Elder and Giele eds. 2009 = 2013; Shahan et al. eds. 2015]。アメリカの研究では、個人情報報の長期履歴といった膨大なデータセットに基づく研究が数多く実施されてきた。また、日本でも、計量社会学のグループが実施した社会階層と社会移動全国調査 (SSM調査) 等の長期データによる研究がある [岩井2015; 金子2022]。

こうした定量研究の進展が見られる一方、本節の冒頭で述べた森岡清美をはじめとした家族社会学者らのように、エルダー [Elder 1974 = 1991] の流れを汲んだ定性研究もまた、森岡 [1993] などの多くの貴重な成果を生んだ。本書の関心と近い農村社会学では、人の生涯に見られる周期性に着目したライフサイクル分析に対し、農家の生活史研究のような、人の生涯を歴史の文脈に位置づけ、社会経済からの影響を重視するライフコース分析の研究がある [石原1996; 大内2000]。本書は定性研究の系譜に連なり、農村社会学と関心を共有するが、後述するとおり、森林と地域

社会との関係を家族にとどまらず、関係する人びとの範囲を集落、産業、行政などにまで広げ、考察を進める。

ライフコース分析の詳細については、本章の参考文献に挙げたテキストに譲る。ここでは重要な概念としてあと一つ、世代、コーホートに加え、「コンボイ (convoy)」を挙げておこう。「道づれ」とも訳されるこの概念は、アメリカの文化人類学者ブラースによって、日本研究の著作の中で用いられた。それは、「ある人の人生のある段階を通じてその人とともに旅をしていく親密な人びとからなる独特の集団」を意味する [Pardi 1980 = 1985: 24]。例えば、ある人にとって、配偶者は長くコンボイである一人の可能性が高いだろうし、また、地域社会における幼馴染の集団もその一つであろう。人の一生において、コンボイの影響もまた重要である。本書では、とくに第2章でコンボイが大きな役割を果たすが、明示的には述べられていないものの、その他の多くの章でもキー概念であることは、このあとの各章を読み進めてもらえばおわかりいただけるだろう。

老若男女さまざまな互いに異なる生年の人間同士が、同時代を共に生きるなかで社会関係が生じる。人の生死によって社会の構成員は常に入れ替わり、過去の影響を受けつつ、社会関係は変動する。ライフコース分析はコーホートをマクロの社会動態とミクロの人間行動の相互連関をたぐき概念として、個人の一生を歴史の中に観察し、その社会関係の変動との関係を描くことで、社会の動態を明らかにしようとする。

3 個人的時間と社会的時間

ライフコース分析の方法論の中で、本書との関係でとくに重視したいのは個人的時間と社会的時間の関係を軸とした歴史社会学的視点である。このことを日本の森林行政を例に説明しよう。⁶

日本における森林行政は、戦前から戦後まで一貫して、技術官僚が大きな役割を担ってきた。これらの森林技術官僚一人ひとりの人生も、地域の森林にさまざまな影響を与え、また森林から影響をこうむってきたことを考えるならば、本書のテーマに深くかかわる。

図序1には明治、大正、昭和戦前期、戦後期を各々代表する森林技術官僚である松波秀実、太田勇治郎、三浦辰雄、小沢今朝芳の四人の生涯が描かれている。

図の横軸は一八八〇年から一九七〇年代までの歴史時間、縦軸は各人の年齢を表す。したがって図に描かれた四本の斜めの実線は、ある年に各人が何歳だったかを意味する。横軸に直交する網掛けは、四人の生涯にとくに大きな刻印を残したであろう出来事である。

左から、①日本に国有林経営を確立した戦前期の一大事業である一八八九年から一九二一年の国有林野特別経営事業、②一九二九年の国有林施業集約度増進予算による天然林施業事業である「天然更新の汎行」、③一九四一年から一九四五年までの太平洋戦争、④戦後の拡大造林政策の端緒となった一九五七年から一九六〇年までの国有林生産力増強計画期の四つの出来事が図示されている。一方の縦軸に直交する二つの水平の実線は、戦前期の多くの森林技術官僚が大学を卒業

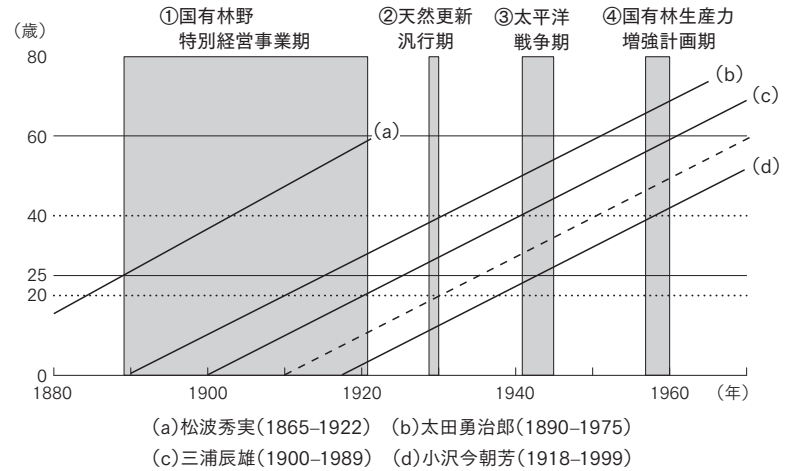


図 序-1 森林技術官僚4世代のライフコース
出所：筆者作成。

し、山林局などに就職した二五歳と退職した六〇歳に引いてある。この二直線の間が森林技術官僚としてのキャリア期間を意味する。まず横軸の切り口から見えていくと、例えば①国有林野特別経営事業期について、(a)松波は三〇代半ばから五〇代にかけて、森林技術官僚としての生涯の大半をこの事業に費やした。(b)太田の森林技術官僚としての駆け出し時期は特別経営事業後半、国有林経営の基盤が完成し、森林技術官僚の役割が重視され始めた時期と重なる。(c)三浦は同事業完成後もなく就職し、(d)小沢はどうかといえば、同事業の最終盤になってやっと生まれたばかりであった。彼らはそのような同時期を生きた。また、縦軸の切り口を二五歳の直線に沿って見れば、各人の森林技術官僚としてのキャリア初期に、どういった社会経済上の出来事に出会ったかを知ることができる。(a)松波は

国有林経営基盤形成の開始、(b)太田は基盤形成終盤、(c)三浦は基盤を前提とした経営の開始、(d)小沢は戦争による基盤の破壊と戦後の再出発に際会した。

四人に限らず、彼らの前後に生まれ、同じような時期に卒業、就職した同じコホートに属する同世代の森林技術官僚たちは、個人的な差異はあるものの、一定の社会的役割が期待される同年齢の頃に同じ歴史的出来事に遭遇した。これら四世代にわたる森林技術官僚は激動の時代の中で互いに交錯した生を送り、戦後日本の森林政策の基層を形成する要因となった。

森林技術官僚四世代の個人的時間と日本の森林政策の変遷という社会的時間の関係を事例として、ライフコース分析がどのような方法論であるかを述べた。このように、個人的時間と社会的時間は幾重にも絡まりつつ、社会変動をもたらす。官僚としての人生に焦点を絞らず、生まれてから死に至る四人それぞれの一生全体を視野に収めれば、いっそう実り豊かな分析が可能となるだろう。

ここでは森林技術官僚という視点からライフコースをとらえたが、本書の各章でこのあと示すように、設定される視角はさまざまである。例えば、一つの集落に生まれ育った数世代、あるいは、一つの家族、林業や木材産業などの業界で一時代を築き、歩みを共にした人たちでもよい。そこに生まれる個人的時間と社会的時間の関係を洞察しようというのが、ライフコース分析の考え方である。

政治家世代」のコーホートを図示した。本図と同様の概念モデルは、嶋崎〔2008: 45〕、エルダーら〔Giele and Elder eds. 1998 = 2003: 98〕にも見いだせる。

(7) 松波秀実は一八六五年生まれ。日本に国有林経営を確立した、戦前期の一大事業である国有林野特別経営事業推進の中心人物。事業終了の翌一九二二年に退官し、四か月後に病没〔大日本山林会編 1931: 早尾 1962〕。太田勇治郎は一八九〇年生まれ。戦前期森林技術者のリーダー的存在。戦後最初の山林局、林野局の技術者局長候補の最右翼でもあった。戦後、日大、信州大教授を歴任。一九七五年没〔太田 1976〕。三浦辰雄は一九〇〇年生まれ。戦前の天然更新事業時に山林局入局、林政統一後の初代林野庁長官。全国区参議院議員等歴任。一九八九年没〔森編 1983: ドキュメント人と業績大事典編集委員会編 2002: 215〕。小沢今朝芳は一九一八年生まれ。木曾、旭川地方帝室林野局、林野庁計画課等。戦後の拡大造林政策の端緒となった国有林生産力増強計画策定の中心人物である。一九六三年、帰宅途中の事故で両下肢麻痺となり、行政の一線を退く。一九六九年退職後、翻訳業など。一九九九年没〔小沢今朝芳追悼文集編集委員会編 2001: 小沢 1978〕。

第1章

山造りに 出会った人びと

——島崎洋路と森林塾——

三木敦朗



1 ふだん着の移住先

長野県伊那市^{いなの}が、地方への移住を考える人びとの興味を惹いている。移住・関係人口促進のマッチングサービスが集計したランキングでも伊那市の順位は近年高く、二〇二二年度は一位だった。『ペレットストーブ』や『薪ストーブ』といったカーボンニュートラルに寄与するエシカルな生活を提案するプロジェクトが人気。森林資源の利活用や、新たな山村価値の創造といった点で……先進的な取り組みが参考』になると評されている [SMOUT 2023]。人気の高さは実績にも表れており、二〇二二年度の移住者は二四〇人を数える。

伊那市を含む上伊那地方の木材生産量は、長野県全体の約七%（三・八万立方メートル、二〇二一年度）である。木曾地方（ヒノキ）や佐久地方（カラマツ）を上回るほどの林業地帯とは言いにくいだろう。南アルプスと中央アルプスを東西に仰ぐが、上高地や白馬のような国際的な観光地や、浅間山や八ヶ岳の山麓のような典型的な別荘地も有さない。裏を返せば、上伊那地方には誰もが共通して持つイメージが少ないので、移住者が新たに意味づけできる余地が多いのである。

伊那市に移住者が多い背景には、関東圏と中京圏の両方からの近さに加えて、行政と地域コミュニティの二重の移住促進活動があることが指摘されている。また、移住促進活動の萌芽期の特微的な取り組みとして「KOA森林塾」が挙げられる [鈴木ほか 2019]。これが、林業地帯ではな

い場所ながら「森林資源の利活用や、新たな山村価値の創造」で移住希望者の注目を集める、今日の素地の一部分をつくった。

KOA森林塾とは、一九九四年度から二〇一九年度まで伊那市内で開催されていた、「地域の小規模山林主」と「地域内外の山を持っていない人」に「山造りの基本的な考え方と基礎的な技術を身につけてもら」うための講座だ。伊那市に本社をおく電子部品メーカーKOA（旧称コーア）が、「農工一体」という創業理念に沿って展開した企業メセナ、CSR活動である。塾を発案したのは、地元大学の演習林長を務めた林学者であり、林業一人親方でもあった島崎洋路^{しまざきようじ}（1928-2021）であった。

島崎と、伊那市の指導林家の保科孫恵^{ほしなまごえ}（1929-2021）を「二枚カンバン」とした森林塾を通じて、のべ九七〇人以上の人びとが山造りに出会った。本章では、島崎と、山造りに出会った人びとのライフコースに着目したい。

2 島崎洋路の引力

◎戦後林業と歩んだ林学者

戦前期に森林分野の技術官僚を率いた太田勇治郎（1890-1975）は、技術者の地位向上を図るなかでこう書いている。

「農林業に就^つて見れば、土地の所有と経営との進化分離せず、一部分を除ては何等^{なんち}の組織力も

担い手」をつくることも必要だと考えた。ボランティアだけでなく、「それより一段上のレベル」で「山造り」に関与する人びとである。今日では、森林所有者でない人が自身の仕事として地域の森林を管理していくことは「自伐型林業」などの言葉でよく知られるようになってきているが、一九九〇年代当時は珍しい概念であった。「山が好きになり、山仕事が好きになり、森林とか林業の見方、考え方をきちんと身につけ、それぞれ何人かの若い人なり後輩を仲間に取り入れながら、山造りができ、その一連として伐った木を運び出して有効利用に仕向けられるような優れた技能集団、すなわち山守り」[島崎 1999]。島崎はそれを提唱するだけでなく、自ら実践しようとしたのである。

山林研修所には島崎を慕う人びとが集まった。弟子たちは二〇〇〇年に任意団体をつくり、仕事を請け負うようになる。二〇〇二年には島崎の名を冠した「島崎山林塾企業組合」として法人化し、今日では森林の集約化や特殊伐採のほか、次世代を育てるプログラムも実施している。そこには島崎から直接教わっていない世代も含まれる。その他にも、弟子たちの中からは多くの林業者が輩出されている。

島崎は、二〇一三年に「第三回みどりの文化賞」を長野県で初めて受賞。KOA森林塾の常勤講師を二〇〇五年まで務めたほか、岐阜県立森林文化アカデミーの特任教授(二〇〇一―二〇〇三年度)、とよた森林学校校長(二〇〇六―二〇一四年度)など、県内外での指導にあたった。二〇〇〇年の東海豪雨を契機に始められた、市民が簡便かつ科学的な方法で広大な森林調査を行う「森の健康診断」にもその影響がみえる[矢作川森の健康診断実行委員会編 2016]。ひろく人びとに

山造りを伝え続けた。

3 森林塾通信の二〇年

◎森林塾への経路

KOA森林塾は、植栽から間伐・伐出までの人工林施業のほか、樹木分類、測樹・測量や林道設計、炭焼きやキノコ菌打ちなど、林業全般をカバーする内容であった。これを一年間で実施する「通年コース」のほかに、三日間の「集中コース」(一九九八年以降)、ステップアップの「集中コース」(二〇〇二年以降)が用意されていた。いずれも有償である。

塾の内容は、年間十数号の『森林塾通信』に記録されている(写真1-2)。ここには塾生が、参加した動機や講座各回の感想、その時々を考えていることなどを自由に書く「リレー通信」という欄が設けられていた[宮下編 2005]。一般に公開されている一九九九年度より二〇一六年度までの計二一五号か



写真1-2『森林塾通信』
出所：KOA株式会社ウェブサイト

ら、参加者のライフコースとの邂逅をとらえることを試みよう。

「リレー通信」には、のべ約三五〇人が寄稿している。塾生全員が執筆したわけではないし、森林とは直接関係のない内容も含まれるので、記されている参加の動機が塾生全体の傾向を示すものとはいえないが、これは史料の制約に起因するものなのでひとまず措く。

まず、なぜKOA森林塾を選んだかという点である。一九九〇年代当時、森林ボランティアでは植樹祭などの行政主導の単発的活動を超えて、市民が人工林の保全活動を行う動きがみられた〔山本編2003〕。実際、森林ボランティア活動をすでに経験していた塾生は多い。森林塾には、それらと異なる何かを求めて来たはずである。

ある女性は、『森林塾通信』二〇〇一年度第二号で次のように書いている（以下、号数を〔2001-〕のように略記）。森林ボランティアでは「私が望んでいた、道具の手入れの仕方や木材の利用方法を教わることは無かった……物足りなさが残りました」。また、男性〔2001-3〕は「なぜ今この山の手入れが必要なのか」「なぜこの木を切るのか」……等々のことを教えてもらえる場・語れる場」が他にないことを指摘している。「ただその日をお客さまの状態で過すのは苦痛」とも言う。参加者は、指示されたとおりに作業をするのではなくて、自らの技能と判断力とを使得て森林と関われるようになることを求めていた。チェーンソーなどの道具の使い方（メンテナンスを含む）と、森林の管理や利用の考え方（理論）ともの見方が身につけられることが、森林塾の特異性だった。これは大学の実習・演習を担当してきた島崎だから發揮できた点だろう。

では、人びとはどのような経緯で森林塾に辿り着いたか。経路を明らかに書いているものの中
で多いのは、①最初期の塾生である作家・浜田久美子の著作等〔浜田1998〕、②島崎の講演や著作〔島崎1999〕、③森林塾を取材した新聞・雑誌記事（別冊太陽『古民家生活術』平凡社、二〇〇二年など）やテレビ番組（NHK「森のドクターと仲間たち」二〇〇〇年二月一日など）、④元塾生など関係者からの伝聞である。インターネットで偶然知ったというケースは後期になるほど増えるもの（初期はパソコン通信だったようである）、全体としては多くはなく、森林塾の活動を伝播する人の話、文章・映像等がきっかけとなって、それからインターネット検索して確かめる方が主であった。

◎ 開発とライフコース

島崎の態度は「来る者拒まず、去る者追わず」であったと、彼を知る人は口を揃えて言う。島崎自身の目標の中心は、森林所有者が学ぶことや、非所有者が「山守り」を目指すことだったはずだが、明らかにそれらと異なる動機の人でも塾生として受け入れられている。これを反映するように、森林塾の参加者個々人が語る動機は一樣ではない。したがって参加の動機に明瞭な傾向を見いだすことは難しいが、ある程度は世代ごとに分類しうる。

森林塾には、経済地理学者の中川秀一（男性〔2011-6〕）が参加しており、「リレー通信」欄で次のように自己分析している。「高度成長期のころに地方から大都市に出てきた世代の親たちは、やがて家族を持つと郊外に終の棲家を求めました。私たち子どもたちは、幼いころには農村風景の中にいて、それから急速に開発されて住宅地に変容していく環境に育ちました。……まだ景気

第2章

山村社会の継承と
女性のライフコース

— 栃木県の山村の二〇〇年にみる
女性たちの歩み

山本美穂



1 「家」と女性

数世代にわたり森林を持続的に管理してきた私有林所有者は、森林のほか農地、屋敷その他さまざまな資産を有し、それぞれの地域社会に少なからぬ影響を与えてきた。そのよって立つ基盤は「家」であり、当主と配偶者が築く家庭を中心に継承され、そして「家」を支える大前提は後継者を産み育てる女性の存在であった。結婚、出産、育児期を通して一日の多くの時間を家族と地縁・血縁のサポートに費やし、人生を「家」と地域社会の中に埋め込んで生きてきた女性の存在は、「家」を家たらしめ、地域の社会関係をソフトにつなぎ、次世代へと継承する重要な要素であったが、その挙動は、ある世代を境に大きく変化している。代々継がれてきた森林は、個人が継承するには重すぎる資産として認識されつつある。とくに二〇一〇年代半ば以降、昭和一桁生まれが八〇歳を過ぎる頃からの世代継承は大きく変化し、男子当主が独身のまま高齢化するケース、独身女子が継ぐケース、家屋敷や墓とともに農地、森林を売却するケースなども散見される。

これらの趨勢をより大きな時間軸ととらえ、山村社会の課題と展望に複眼的な視野で答えるために、本章では、一女性とその周囲の社会関係Ⅱコンボイ（本人の行動や態度や価値観を左右する意味ある社会関係をなす人びと。本書序章参照）に注目し、とくに山村社会の継承とそこに生きた女性の

のライフコースを明らかにする。

2 ある山村の二〇〇年と世代

◎小来川おこがわの地誌

栃木県日光市小来川地区は、南小来川、宮小来川、東小来川、中小来川、西小来川、滝ヶ原の六つの大字で構成され、一〇〇〇メートル級の山岳に囲まれた人口七三七七人、世帯数三一三三戸（二〇一七年一〇月一日現在、住民基本台帳より）、総面積約五〇六五ヘクタールの九四％が山林に覆われた山村である。一級河川黒川の源流域に位置するこの地域は、日光開山の祖である勝道上人ゆかりの黒川神社、円光寺を中心に村の歴史が刻まれてきた。山間にありながら一千年以上の歴史を有し、宗教はもとより政治的にも文化的にも発達した開明的な地であった【平田編 1955: 190-294】。江戸期に日光廟が置かれてからは全村三八組（伍組・五人組）で構成される日光神領の一つとなった【福田 2003: 13】。村人の社会的結びつきには、氏神信仰が大きな要素を持った。坪と呼ばれる小字の氏神を共同で祀り、各坪が大字の氏神の行事を行うと同時に、村の鎮守である黒川神社では氏子全員が参加する春秋の大祭等を行ってきた。村人の生活が、近世以前からの慣習に基づいた祭礼と深く関わり合い、営まれてきたと言つてよく、二〇二四年時点においてもこのことは当地域の人びとにとって欠くことのできない一種のアイデンティティとなっている。

全国的に造林推進の風潮が見られるのは近世の文化文政期（一八〇四―一八三〇年）とされるが、



写真2-1 孫にあたる権暎が1921(大正10)年に建立した福田権作の顕彰碑
出所：筆者撮影

栃木県における造林意欲の高まりは、少し遅れた天保の改革期(一八三〇—一八四三年)で、農山村民自らが、凶作・飢饉に備えて村持地へ自主的な造林を行ったことが確認されている[栃木県林務部編1957:58-59]。農山村の住民にとって、林野は第一義的に農業を支える大量の草木類の給源として、

用材、燃料材、山菜類、樹実類、葉草、油や紙の原料の給源として欠くことのできない重要な要素であり、この対象地は通常「入会」つまり集団的利用慣行がなされる村持地ととらえられてきた[林業発達史調査会編1960:11-18]。農山村における育成林業のスタートは、これら村持地においてまず展開したと考えられる。

二〇二四年現在、森林の一〇〇%を民有林が占め、その多くがスギ、ヒノキの人工林である。江戸期に植栽された百姓林約四〇〇町歩の実績から、明治期の官民有区分の際に村域のほとんどは民有地とされた。しかし、入会林野は壬申地券交付の段階で公有地に編入され、隣村の板荷村との共有入会山の帰属をめぐって、村を挙げての下げ戻し運動が展開した[栃木県史編さん委員会編1982:198-204]。一八七八(明治二)年から一八八三年に至るこの「山中山事件」で、村民側

の代表として奔走し公権力に立ち向かった当時の戸長、福田権作の顕彰碑が、当地西小来川の福田家地内に建てられている(写真2-1)。権作は四方山林に囲まれた当地において、江戸期からの部分林制度を私有林での分収林契約に導入し、先頭に立ち積極的に植林を奨励した[栃木県林務部編1957:95]。当地は通直完満のスギ良材の産地として高い評価を得ており、鉄道網の発達も手伝って明治後期からは電柱材産地として栄えるようになり、一九一九(大正八)年には通信省納めの電柱の三分の二が小来川村一村で賄われる[福田2003:21]などの輝かしい実績も生まれた。

◎福田家〇二〇〇年

古くからの歴史を持つこの地で七〇〇年来の家屋敷一切を受け継いできている福田家であるが、本稿を展開するにあたっての時間の射程は、大きくとらえてこの家の一七九九年から二〇二三年までの約二二四年間である。その中で存命中の一人の女性とそのコンボイ集団に焦点を絞り、さらに一九六九年からの五四年間のストーリーを記述する。時間軸を比較的大きくとらえることを可能としているのは、福田家の家督継承の確実さである。福田家の場合、この約二〇〇年の間に、次のとおり九世代が含まれている(図2-1)。^①寛政年間に生まれ天保期の植林ブームに三〇(四〇代を過ぎ)した定助(1799-1861)とその妻、ウメ(1803-1879)、^②定助一九歳、ウメ一五歳のときの息子で二九歳で夭折した庄之助(1818-1847)とその妻、天伊(1818-1886)、^③一八七六(明治九)年に戸長を務め、官民有区分の際に村人たちの先頭となって公権力に対峙した権作(1839-

対象地域とするCRT栃木放送で、栃木県木材業協同組合連合会ほか一七社の提供による一分番組「もくりん森日記」が計二六回放送された⁷⁾。このディレクターを務めたのは川上と同世代である一九六〇年代生まれの女性デザイナー、毎回のゲストを迎える進行役を務めた「木輪」の立ち上げメンバーは前述の宇都宮大学の「林業女子会@栃木」OGであった。「木輪」のメンバーは、栄子らの「こもれびの会」が篤林家の妻を主体とした「川上」側であったのとは対照的に、製材・加工・住宅建築など「川下」側の勤め人が主体であり、その主要な関心は森林資源だけにとどまらず木材の最終消費にまで広がった。ラジオ番組出演のほか、イベントでの出店、交流会、勉強会、産直ツアーなど多岐にわたり、SNSを駆使し、民間企業のフットワークと突破力、発信力を活かした活動を展開した。

二〇二〇年代、この世代が三〇代に差しかかると、主要メンバーは結婚、出産、育児に多くの時間を割かれるようになった。大学卒業後、故郷を離れた環境下での育児は、栄子らの世代とまったく異なる課題に直面しており、これに加えて二〇二〇年からのコロナ禍による影響で、活動の局面は大きく変化している。栄子たちのレストラン「山家」は当初の目的を達成して解散し（二〇二〇年）、川上晴代たちが情熱をかけたLN21は「森女ミーティング」⁸⁾へ発展的に解消し（二〇二二年）、ここに来て、それぞれの活動を担った層が明らかに世代を次に交代したのである。二〇二四年現在、次なるZ世代（一九九〇年代後半から二〇〇〇年代序盤生まれ）がすでに大学を卒業して社会人となったが、その船出はコロナ禍により、栄子、川上らの時代とはまったく異なる環境のもとにある。

6 山村・森林・林業・林産業と女性たちのこれから

本章では栃木県を主な舞台として、約二〇〇年前から二〇二三年までを大枠としてとらえ、福田栄子を中心に、女性たちがどう生きたかを記述した。農村社会に比べて、山村社会にはある意味での階層性が存在し、人間関係も「縦社会」の上に成立する傾向がある。当事例は、山村の名家に嫁いだ団塊世代の女性が、リーダーとしての資質を大いに発揮し、地域の女性たちを率いていたという話を柱とし、そのコンボイたちをサイドストーリーとして展開した。順に振り返りながら総括したい。

周囲と隔絶された山村である小来川で、七〇〇年にわたり名家を継承し、自家山林、農地での作業のほか多くの集落行事、共同作業に従事し、当主とその妻を中心とする数世代の直系家族によって担われていた最後の当主世代は、福田家では大正後期から昭和一桁世代のサノである。その子ども世代である団塊世代の栄子は、県のイベントをきっかけに世界を広げ、女性たちのリーダーとなって「こもれびの会」を率い、さらに地域に女性の就労の場をつくり、来訪者を受け入れ地域振興にも貢献した。高度成長期を境に女性と家族のあり方が大きく変わり、その境目に存在する大群の出生コホート（人口群）、団塊の世代が時代に残したととらえられる。

団塊ジュニアにあたる栄子の長女、長男は大学進学を機に家を離れ、それぞれ家庭を築いた。低成長長期に育ち、バブル崩壊後の不況の中で生活を築いた世代である。長男とその家族は生活の

(6) 栃木県環境森林部林業振興課の呼びかけで二〇一六年に組織された任意団体。同課内に事務局を置き、現会長は橋本真理子。

(7) 「もくりん森日記」は栃木県木材業協同組合連合会ほか一七社の提供により、CRT栃木放送で二〇一六年一〇月から二〇一七年三月までの毎週土曜日の午前八時四五分〜九時に計二六回放送された。

(8) 「森女ミーティング」は、林野庁「多様な担い手育成事業」のもとに全国林業研究グループ連絡協議会(全林研)が企画運営するオンライン上のグループで、「女性林業者への情報提供及びネットワーク構築、女性林業者に対する優良活動事例等の情報の提供、女性の知恵や工夫を活かした林業の普及啓発と地域活動・生産活動の促進」を事業目的とする。

第3章

山と川と共に暮らす 集落と住民の生活史

竹本太郎・佐藤周平・松村苺



1 二〇二〇年四月の集落合併——動き出した「不動」

「サンガザ」を最初に訪れたのは二〇一七年の一月だった。サンガザとは三つの字からなる連合会のこと、「三ヶ字」と書く。その年の初雪がちらつくなか、不動生産森林組合の事務所で灯油ストーブにあたりながら、この地域の暮らしや歩みについて組合長や総代に話を伺ったのを憶えている。このとき木箱二つ分の資料と木箱一つ分の地図を確認したが、主にサンガザ（三ヶ字）の運営に関するもので、森林に関するものはとても少なく、用水の費用分担に関するものが多かった。

新潟県上越市名立区を流れる名立川は、奥にそびえる妙高山や火打山の前にちよこんと座っている三角形の不動山（標高一四三〇メートル）を源流として日本海に注ぐ（写真3-1）。この名立谷の最奥に位



写真3-1 名立川から望む不動山
中央に見える小さな三角形の山が不動山、正面にある建物が旧不動小学校校舎
出所：竹本撮影（2023年12月）

置するサンガザ（三ヶ字）は、下瀬戸（聞き取り調査で二〇二四年一月現在一三世帯）、上瀬戸（同二七世帯）、東飛山（同二八世帯）の三集落によって構成される。そして、サンガザ（三ヶ字）の住民による不動生産森林組合が不動山一帯の約二三〇〇ヘクタールの山林を所有する。不動山にはブナが優占する広葉樹林が広がっている。

三集落の中で北側（海側）にある下瀬戸は、残りの二つから地理的に少しだけ離れている。一方、南側（山側）にある東飛山と上瀬戸は家屋が互いにモザイク状に入り組み、一つの集落のようである（図3-1）。トタンで覆われた萱葺寄棟造の屋根が並ぶ集落景観（写真3-1-2）や、稲を干すハサが立ち並ぶならかな棚田景観（写真3-1-3）は、ここが豪雪地域でありながらも雪解け水による豊かな水田地域であることを

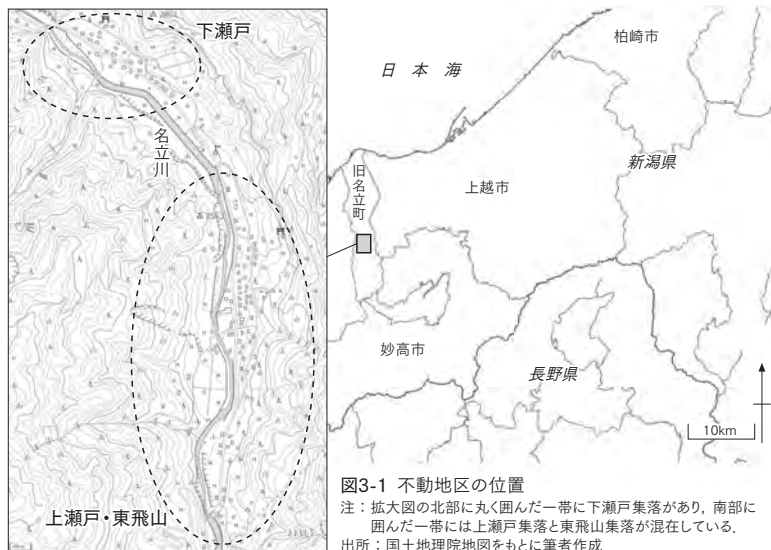


図3-1 不動地区の位置
注：拡大図の北部に丸く囲んだ一帯に下瀬戸集落があり、南部に丸んだ一帯には上瀬戸集落と東飛山集落が混在している。
出所：国土地理院地図をもとに筆者作成。



写真3-2 上瀬戸と東飛山の家々
トタンで覆われた葺葺屋根の家屋が目立つ
出所：竹本撮影(2023年5月)



写真3-3 田植えの時期の不動
稲を干すためのハサが立ち並ぶ
出所：竹本撮影(2023年5月)

た。外部者からすると、この合併は、住民の少子高齢化を理由として地域の役職や体制を簡素化したという小さな出来事のようにも思える。しかしながら、ここに至る道程は平坦なものではなかった。

そもそも家屋が互いに入り組んでいる東飛山と上瀬戸はなぜ独立を維持してきたのだろうか。

もっと早くから一緒になっていてもよかったように思える。実はこの二集落は一九五八年に合併した経緯を有するが、一部の住民の反発があったため、四年後の一九六二年には合併を解消して

いる【高宮1971: 97】。一九五一年に上名立^{かみなだち}小学校から分離独立した不動小学校(二〇〇二年まで存続した)も東飛山と上瀬戸の子どもたちだけが通う学校だった¹⁾。また、二〇〇七年にはこの二集落の住民を中心に「不動を創る会」が設立され、イベントの開催などを主導してきたが、それでも独立を維持してきたのである。

このような複雑な状況を理解するためには少し時代を遡る必要がある。三集落では明治期の地租改正まで「車地^{くるまぢ}」という制度で田を管理していた。車地とはいわゆる割地制度のことで、当時の瀬戸村(上瀬戸、下瀬戸)と東飛山村では「十年一巡り持高によって田を輪作」した²⁾【高宮1971: 17】。この割地制度とは一定期間で耕作地(山林の場合は山割あるいは割山と呼ぶ)の割替を行うもので³⁾、地租改正以前の新潟県や石川県などで多く存在した【佐藤2010】。年貢を村が納める村請制のもとで住民間の公平性を担保するもので、水害が頻発する地域などで多く見られた【松沢2022】。フィリップ・ブラウンは名立谷を含む新潟県内の割地をコモンズ論の立場から取り上げて、自然災害のリスクとの関連を検証している【Brown 2011】。

三集落では地租改正によってこの車地が廃止され、田だけでなく、共有地を除いたすべての土地が各戸に固定されたが、このときに三、四戸のまとまりである「名(苗族)」が土地を抽籤^{ちゆうせん}し、その土地の中で各戸の持分が決められた【高宮1971: 17】。

サンガザ、正確には三ヶ字連合会は、この土地制度の変更と同時期の一八八四(明治一七)年に発足した組織であった。土地が固定されて各戸が地租を納めたとしても、集落の公共的な支出や収入を公平に負担・分配するため、新しい組織や制度が必要になったと考えられる。これが、

教えてくれる。

二〇二〇年四月、サンガザ(三ヶ字)を構成していたこの三集落が合併した。それまで三集落にはそれぞれ町内会があったが、二〇一九年度末に解散し、二〇二〇年度から新たに「不動町内会」として一体化したのである。不動町内会は二〇二〇年五月には認可地縁団体としての法人格も得

約二四坪と、旧戸の約四八坪の半分程度であったほか、萱葺率も三〇%以下であり、旧戸の一〇〇%と比べて著しく低かった。聞き取りによれば、新戸の多くは新築であったが、経済的な理由で建物面積を小さくし、屋根も手間のかからない板葺が多かったと、台帳データと符合した。また、不動産においては、「カヤタノモシ」（屋根の葺き替えを順番に行う相互扶助）のために、カヤバタと呼ばれる畑を持つ各戸が萱を集めたという。カヤバタを持っていない新戸が板葺にせざるをえなかったという理由も考えられる。さらに、明治中期から昭和初期における上瀬戸での旧戸の家屋の変化を見ると、二九戸のうち、他出一戸、居宅の建て替えや集落内転居が六戸あるものの、八割近い二二戸では居宅に大きな変化は見られなかった。

それでは、第二次世界大戦後、農地改革を経て、不動産の家屋はどのように変遷したのだろうか。建物台帳はないが、戦後から現在にかけての建て替えや改造、修繕については聞き取り調査によってかなり詳細に明らかにできるだろう。調査は現在進行中であるが、わかってきたことをいくつか挙げておきたい。まず、「四〇年災害」の影響が大きい。一九六五（昭和四〇）年九月に発生した台風二四号によって名立川が氾濫し、不動産でも甚大な被害が出た「閉町記念誌編集委員会編2005:名立町役場企画財政課1985」。大規模な復興工事（名立川の護岸工事、県道の工事、水田の復旧工事）に、萱葺職人をはじめ多くの住民が作業員として携わり、萱葺作業よりも手取り早い現金収入を得た。その結果、一九六五年以降、萱葺職人主導で、萱葺屋根のトタン化工事が進んだという。また一九八五年頃に県道改修工事に伴い、県道沿いの民家の建て替えが進んだこと、二〇〇〇年頃に農業集落排水の導入に伴う水回りの改修が進んだことなどがわかってきている。

上瀬戸の台帳分析で旧戸と新戸で萱葺率が異なるのは、分家した新戸の経済的な理由に加えて、旧戸の「本家」としての家格意識「伊藤・高井2004:128-129」もあるだろう。一方で、戦後からの建て替えや萱葺屋根のトタン化は、水害や公共工事・公共事業に影響されていることがわかってきた。さらに、増改築や新風呂のガス化などは、結婚や出産、介護といった家族のそれぞれのタイミングにも関わる。

少子高齢化や近年頻発している激甚災害といった喫緊の課題のなかで、豪雪地帯の不動産に住み続けることは決して容易くない。美しい伝統的な古民家の再評価も重要ではあるが、現代的な増改築や修繕によって生活様式の変化に対応していく不動産の知恵や工夫こそに、住み続けるための学びがあるのだろう。

4 住民のライフコース——三世代の歩み

「ライフサイクル」が生物的な時計であるのに対して、「ライフコース」は社会的な時計である。例えば同じ場所に生まれたとしても、明治生まれが二〇歳のときに期待された社会的な役割と、現在の二〇歳のそれはまったく異なる。もちろん同じ明治生まれであっても、場所（例えば東京と不動産）によって社会的な役割は異なっただろう。

本来、ライフコース分析は、寿命の伸長、個人の選択と行動、時間と場所、タイミング、連携する人生に基づいて、個別の履歴を長期的に観測して（追跡型あるいは遡及型で）集団的・社会的

な特徴を見いだす方法である [Elder et al. 2003: 11-13]。そのため、世代が異なる男性三名への聞き取りから言えることには自ずから限界があるが、不動で暮らす彼らの人生は、日本の農山村が短い間に急激に変化したことを垣間見せてくれるだろう。

◎金子巧さん(一九三二年二月生まれ)——バッサイヤ(伐採屋)

金子巧さん(写真3-4)は、一九三二年二月に七人きょうだいの上から二番目(一番上は姉)の長男として、東飛山の屋号「彦八」^{ひこはち}の家に生まれた。前年(一九三一年)の満洲事変に引き続いて、傀儡国家の「満洲国」が建設され、五・一五事件で犬養毅^{いぬかいぎ}首相が暗殺された頃である。聞き取りをしたときにはすでに八七歳の「古老」であったが、しっかりとした口調でお話しされていた。

尋常高等小学校(不動分教場)を卒業したが、高田農業高等学校への進学はあきらめざるをえなかった。巧さん自身は戦地に赴くことはなかったが、太平洋戦争終戦直後の貧しい時期に一家を支えることになったからである。食べるものもなく、みんな戦死してしまって農業の担い手もいなかったため、一家を農業で食べさせる必要があった。

そこで、小さな何枚かの田を一枚にまとめるなど、まず圃場^{ぼじょう}を整備した。肥料にはマヤゴイ(馬糞^{ばふん}、ウマゴイ)のほか、石灰窒素、ドテクサ(土手草)を用いて、食糧を増産した。マヤゴイとは馬の糞尿と敷藁を堆肥にしたものである。耕耘^{こうくん}や移動の手段として重用した馬は家族同様の扱いで、一家が暮らす家屋の中に厩^{うまや}があった。巧さんの馬は美しい白馬だった。「そこに馬が

いたんですよ」と玄関の横を指さしながら、思い出を懐かしそうに語ってくれた。

しかし、米だけでは一家の生計はなかなか成り立たなかった。この頃、不動では養鶏(鶏卵)、養蚕^{ようさん}、畜産、製炭などが副業として盛んになった。戦中から広がり始めた養鶏は、一九四五年に不動養鶏組合が設立された頃には全戸で行っていて、多いものでは一〇〇羽を飼育していた[高宮 1971: 45]。巧さんはまだ一〇代だった一九四八年頃から冬場の農閑期にスミタキ(炭焚き)を

始めて、一九六五年頃まで十数年行っていた。白炭と黒炭の両方を作っていた。一九六一年に結婚した。妻のサカエさんは下瀬戸出身で、この頃は巧さんのように不動内や名立谷から嫁を取ることがほとんどであり、外部から取ることは珍しかったという。そのとき一番下の弟はまだ五歳で、二四歳離れていた。

巧さんは東飛山で二番目に多く山林を所有している。この持山には、ナラが多く、家から一〜二キロメートルの範囲に一五〜二〇町歩ある。そのため自ら製炭するだけでなく、エイギヨウや立木販売を行っていた。エイギヨウ(営業)とは、ヤキコ(焼き子)を集めて製炭させることで、柏崎からもヤキコが来ていた。立木販売とは、ほかの製炭業者に持山の立木だけを販売することである。



写真3-4 金子巧さん(撮影時87歳)、サカエさんご夫婦
出所：金子さん宅にて竹本撮影(2019年2月)

て実施してきたことを参考にしている。不動生産森林組合は、紙谷氏からアドバイスをもらって不動山のブナを間伐し、販売している。また不動山にはブナのほか、ウダイカンバ（マカバ）、ミズメ、イタヤカエデなどがあり、これらの広葉樹材の活用にも期待がかかる。

(10) 二歳下に長女、五歳下に次男がいる。現在、長女は妙高市新井、次男は上越市直江津に在住している。

第4章

福島県浜通りの 近代と森林・断章

山本伸幸



1 二〇二三年春、JR木戸駅前

JR常磐線のいわき駅（福島県いわき市）から各駅停車で七駅、三〇分ほど北上すると、木戸駅きどに着く。小さな駅舎を出ると、駅前ロータリーを挟んで、真新しい二階建てのホテルがすぐに目に入る。ホテルの主な宿泊客は、東日本大震災の復興事業や原発関連事業の関係者の長期逗留や、隣駅のJヴィレッジでのサッカー合宿の高校生らである。東日本大震災、福島原発災害から二二年が経過してなお、空き家や更地が目立つ駅前の町並みの中で、建設からまだ数年しか経たない白と茶の外壁がひときわ目立つ。

すでにほとんど面影は残っていないが、ホテルのある場所には、数年前まで一軒の製材工場が建っていた。製材工場は震災の日、稼働を止め、その後、工場建屋が撤去された更地に、いまの震災復興ホテルが建てられた。この工場を操業していたのは石川林業という製材会社だった。

ホテルの向かいには、震災以降無人となった豪壮な木造二階建ての屋敷が、震災時の傷跡そのままに建っている。釘一本使わず、壁に竹と漆喰しよしよの瀟洒な細工が施された戦前の宮大工の手によるその建物には、石川浅次郎の表札がいまも残る。すでに覚えている人も少なくなつたが、石川林業の社名はこの建物の主であった社長の石川浅次郎の名とともに、福島県内は言うに及ばず、全国の林業界、木材業界にまで広く知れ渡っていた。

石川林業の敷地の裏手には、かつて林野庁（戦前は山林局）木戸営林署があつた。この営林署は石川浅次郎が先頭に立った熱心な誘致運動の末に、隣接する富岡とみおか営林署から分署し、開設に漕ぎ着けたものである。木戸営林署には歴代七人の署長が着任し、浅次郎と交誼こうぎを結んだ。その中で、一九四五年夏の敗戦を挟む、日本が非常に厳しい時期の署長が菅田裕すげだゆうたかだった。

本章では、石川林業社長の石川浅次郎（1898-1966）と木戸営林署長の菅田裕（1908-1945）、二人の人生のつかの間の交錯に光を当てる。福島県浜通りの木戸駅前のこの場所を起点に、二人やその周辺の人びとが森林と関わるさまに目を凝らすことで、近代日本における森林と林業の断章をすくい上げたい。

2 福島県双葉郡木戸村

◎阿武隈山地の森の恵み

福島県双葉郡ふたばぐん榎葉町えんはまちは知らなくとも、Jヴィレッジのある町と言えば、思い当たる人も多かるう。現在は当初の姿に戻り、サッカーのナショナルトレーニングセンターとして運営されるJヴィレッジだが、東日本大震災後しばらくの間、ここは原発事故の対応拠点として最前線の重要施設だった。榎葉町と北隣の富岡町とみおかまちをまたぎ福島第二原発が立地し、そこから一二キロメートルほど海岸線を北上した福島第一原発では廃炉作業が続く。

榎葉町は木戸村と竜田村たつたむらが一九五六年に、いわゆる昭和の大合併を契機として誕生した。旧村



写真4-1 女平の丸三製材所(1915年)
出所：檜葉町歴史資料館蔵

の木戸村、竜田村はいずれも一八八九(明治二二)年の町村制施行に伴う明治の大合併で発足した行政村である。国道六号線と常磐線が並行して南北に走り、旧村に一つずつ、木戸駅と竜田駅という鉄道駅がある。

両旧村は木戸川を挟んで南北に隣接し、東に太平洋を望み、西に阿武隈山地が連なる。山から吹き下ろす乾いた風は、木材の乾燥に適しており、紡錘形のなだらかな形状をした地形の上に育まれた豊かな森林資源を目当てに、大正期になると木戸村にいくつもの製材工場の立地を見るようになった。

そうした製材工場の中でひととき異彩を放ったのは、一九一五(大正四)年に創業した丸三製材所である。福島県磐城郡鮫川村(現いわき市)と茨城県多賀郡松原分村(現高萩市)、茨城県多賀郡国分村(現日立市)の三人の木材商が共同経営した丸三製材所は、木戸川上流の川内村村有林六

里四方の山を買い上げ、クリ、ケヤキ、モミ、マツ、スギといった豊かな森林資源を伐採した。運材は初期には木戸川の水運、のちに木戸川を内陸に七キロメートルほど入った、川内村と木戸村村境の女平に五〇馬力の水車動力による丸ノコ製材工場を建設し、森林軌道で木戸駅まで輸送

した(写真4-1)。多くの雇用を創出し、子弟の学校まで運営した丸三製材所だったが、その栄華は長くは続かず、一九二二(大正一一)年の木戸川の氾濫と土砂崩れで工場が大きく損壊し、廃業した「川内村史編纂委員会編1992:633-641; 檜葉町史編纂委員会編1995:30-31, 633-641」。

丸三製材所がなくなつたのちも、多くの製材所ができては消えた。製材所が挽く木材だけではなく、そこから産出される薪や木炭、シイタケ、クリ、山菜などの特産物、狩猟鳥獣など、阿武隈山地はその豊かな森の恵みを地域にもたらした。その周辺には人びとが集い、暮らしの営みが生まれた。昔から営々と続く光景だが、近代社会におけるそれは、きわめてドラスティックな展開を見せる。

◎ 不要公課村川内村

明治政府の山林原野官民有区分によっていったんは官有林とされた森林を、再度、民有林に引き戻そうとする運動が全国各地で見られた。とくに一八九九(明治三二)年の国有土地森林原野下戻法施行によって法制度が整備されてから引き戻しの行政訴訟は増加したものの、その中で勝訴して引き戻しに成功するものは数えるほどであった。

木戸川上流の川内村はその数少ない成功事例の一つであり、明治末の一九一一(明治四四)年に台帳面積約六五〇〇ヘクタール、実測面積約一万七〇〇ヘクタールという全国市町村の中で二位の規模の官林から民有林への転換を勝ち取った。折しもこの前年の一九一〇年から内務、農商務兩次官の共同通牒による部落有林野統一による公有林野整理開発が推進されており、川内村も

国の方針に従い、新たに獲得した民有林を村有林とした。この出来事を契機として、川内村の森林は大きな変動期を迎える〔山口1938a, 1938b, 1938c; 川内村1994〕。

長年の引き戻し訴訟で疲弊した村財政にとって、新たに生まれた村有林の膨大な森林資源は干天の慈雨であった。村議会全会一致で公有林野立木特売規程が制定され、多くの製材用材が伐採された。前項で触れた丸三製材所の需要を支えたのも、そうした木材資源であった。乱伐を危惧した福島県は技師を派遣し、一九一六（大正五）年には施業計画が立てられたが、計画どおりの秩序ある植伐はなかなか得られなかった。

製材用材に加え、木炭生産のための燃料伐採量も急増した。一九一七年の磐越東線開通によって隣村の川前村に駅ができ、東京方面への輸送コストを下げたこと、隣の石川郡の大竹亀蔵が考案し、当時一世を風靡した大竹式改良窯による生産性上昇もこの動きを後押しした。丸三製材所の従業員のほか、木炭生産に従事する焼子と呼ばれる人びとなど、多くの移住者が川内村に流入し、一九二〇年には村の全人口約五五〇〇人のうち、移住者人口がそれ以前からの居住者を凌駕するまでになった。

住民の税金に基づく財政運営を行う戦後の自治体と異なり、戦前期の町村制では自らの財産収入を財政支出に充て、住民の税金に依存しない不要公課を理想とした。あくまで理想であり、実際に不要公課を実現した町村はあまり多くなかったが、この時期の川内村は膨大な森林資源を元手に、不要公課村の榮譽を手にした数少ない自治体であった。

3 石川林業社長・石川浅次郎

◎石川林業の創業

石川林業の経営の詳細については、帳簿資料などの実証分析が重要だが、残念ながら今回は入手できなかった。ここでは、石川浅次郎の一周忌に編まれた追想録「石川浅次郎記念刊行会編『60』」とお孫さんの石川大蔵さんをはじめ、往時の石川林業を知る方々への聞き取りをもとにその軌跡を描いてみたい（写真4-12）。

丸三製材所創業の二年後、一九一七（大正六）年に木戸駅前に石川材木商店が開業した。この物語の中心人物の一人である石川浅次郎の生家、のちの石川林業である。常磐線の延伸で木戸駅が開業したのが一九一八（明治三二）年なので、すでに東京方面への交通の便は良かった。

石川浅次郎は一八九八年に生まれる。幼名を徳三とい、一九四〇年に父が亡くなったのち、父、浅治郎の名前の「治」を「次」に一字変えて継ぎ、浅次郎に改名した。少し紛らわしいので、ここでは便宜的に父を初代



写真4-2 石川林業の工場内の石川浅次郎（1963年）

左が浅次郎。その横の大丸太はモミ

出所：石川浅次郎記念刊行会編〔1967：101〕

が異常な高騰を見せ、河野一郎農林大臣のもと、価格鎮静化のための木材緊急輸送措置が閣議決定された。同年八月、東京の消費者に豊富な供給量をアピールし、価格安定化に資するため、近郊の木材産地各地から丸太を満載し、「林野庁緊急輸送」の横断幕を張ったトラックパレードが数日にわたり挙行された。その初回は、前橋管林局が群馬、栃木、福島のスギ一千石（三〇〇立方メートル弱）を三三台のトラックに積み、皇居前から霞が関、新橋までパレードし、世間の耳目を集めた。この際、福島の手当てに浅次郎はあたった。

一九六六年九月二一日、東京築地の聖路加病院で浅次郎は胃がんのため亡くなった。享年六七歳。その前日の二〇日には、洞爺丸台風の際に苦楽を共にした元林野庁長官の石谷が五八歳の若さで亡くなっている。浅次郎の葬儀は檜葉南小学校で、福島県木材協同組合連合会、福島県消防協会、檜葉町、檜葉町消防団の合同葬で行われた。弔問に訪れた多くの人びとで小学校の講堂は溢れ、校庭にはたくさんの花輪が並べられた。

4 木戸管林署長・誉田裕

◎一九三四年卒林学士と「外地」

この物語のもう一人の主人公である誉田裕が東京帝国大学農学部林学科を卒業し、樺太庁に奉職したのは、駒場から本郷への農学部移転を翌春に控えた一九三四年だった。同期の帝大卒林学士には、林業基本法制定時の林野庁長官である田中重五、宇都宮高等農林と九州帝大の林政学教

授を歴任した塩谷勉、帝室林野局から九大森林経理学教授に転じた井上由扶らがいる。塩谷は誉田と同じ東京帝大、田中が京都帝大、井上が九州帝大の出身である。

この時期、大学、高等農林の林学科卒業生の多くが、誉田と同様、大日本帝国の領土である朝鮮、台湾、南樺太、関東州、南洋群島のいわゆる「外地」（南樺太は一九四三年内地編入）、あるいは、新たに建国された「満洲国」へと赴いた【山本2013;中島編2023】。

「外地」とはもともと、一九二九年の拓務省設置後、殖民地に代わり、公文書から普及した行政用語である。外務省の公式見解では、「日本の領土中憲法の定める通常の立法手続きで定立される法が原則として施行されない地域、換言すれば異法地域」を指す。また、時に「満洲国」や仏印など、日本と特殊の関係にあった諸国まで、外地に含めることもある【向2007】。大きく時代が動くなかで、新天地は若者たちを惹きつけた。

誉田が卒業した一九三四年の東京帝大林学科卒は四一人だが、そのうち三割近くにあたる二人が外地に就職した。内訳は、朝鮮が三、台湾が一、樺太が二、満洲が六であり、社会整備を進める「満洲国」政府あるいは満鉄に職を得た者がとりわけ多い。同年の林学科卒業者の外地への就職割合は、内地の帝大、高等農林のいずれも二〜四割であり、水原（朝鮮）、台北（台湾）の外地農林学校卒業者を加えると、多くの若者たちが新たな林業建設に身を投じた【紫友会学芸部編1936:126-128】。

誉田と大学同期の塩谷が戦後に書いた回想記を読むと、外地の記述が溢れ、当時の学生たちの気分をうかがい知ることができる。逸話をいくつか拾い上げてみよう【塩谷1967;山本2016】。

- (5) 『遊樂しほり』敷香案内所、一九三七年（北海道立図書館蔵）。人口の急増する敷香では、花街も賑わった。冊子には日本髪を結った芸妓の写真や当地の小唄が掲載される。
- (6) 『待望の外材——第一船入港』『林業福島』第二号、一九六三年。『林業福島』は県監修、外郭団体発行の広報誌である。一九六六年発行の第三八号では、当時林務部局トップの川床典輝が浅次郎の追悼文を寄せている。
- (7) 戦争末期、製塩増産の国の林務関係の計画を浅次郎が村につないだとの証言がある「石川浅次郎記念刊行会編 1967:131-133」。
- (8) 仙台の下宿のエピソードは裕子さんから直接伺ったほか、追悼集の中で、菅田の次の木戸営林署長となった小田精も触れている。追悼集執筆時の小田の肩書は札幌営林局長だが、浅次郎を愛称の「カンチャン」で呼ぶなど、形式ばらない哀悼の辞が綴られる。同書執筆の多くの林野庁職員の記事も同様に、浅次郎との距離の近さを感じる「石川浅次郎記念刊行会編 1967:63-66」。
- (9) 『観察絵本 ミクニノコドモ』第十六輯第八編「スミヤクオウチ」、日本保育社、一九四三年一月号。戦時中は雑誌名とともに社名も変更となった。本号では表紙に東京営林局指導が謳われ、見返しには前東京営林局長・大政翼賛会実践局経済第二部長の須田立が、「一塊の炭 一片の薪」と題した保護者向け文章の中で、戦時重要物資としての薪炭の重要性を説く。
- (10) 『林業経済学会二〇二二年春季大会シンポジウム 今も続く原子力災害による森林・林業・山村への被害と復興』は、震災後一年目に初めて、林業経済学会がこの問題に向き合った貴重な機会であり、筆者もコメンテーターを務めた。シンポの討論記録は、『林業経済』第七五巻第七号、二〇二二年所収。註1で触れた金子〔2022〕は、このシンポジウム論文の一本である。

第5章

紙・パルプ産業と 地域持続性の懸隔

——王子製紙山林部の展開と
現場作業組織の相互連関



早船真智

1 紙・パルプ産業と森林

紙・パルプ製品は現代の私たちの生活にあまりにも当然のごとく存在しており、その原料が木材であり日本のみならず世界の森林とつながっていることは意識しづらいだろう。

日本の現在の紙・パルプ産業（製紙産業）につながるいわゆる洋紙産業は一八七〇年代に始まったが、当初の原料は樺^ほや稲^い藁^{わら}であった。一八九〇年代になると木材パルプの工業化に成功し、天然林のモミ、ツガが得やすい静岡県にパルプ工場が設立され、一九一〇年代には豊富なエゾマツ、トドマツ（エゾ・トド）資源を求めて北海道に工場が進出した（図5-1）。そして、樺太などの外地への進出と喪失を経て、内地のアカマツ、ブナ、その他広葉樹、製材端材^{はぎ}チップ（国産針葉樹）、輸入チップ利用へと展開して現在に至る（図5-2）。

紙を作るためには木が必要である（紙・パルプ企業）。木を得るためには伐って運ぶ必要がある（現場作業組織・輸送業者）。そして、そもそも利用できる木が生えていなければならない（森林所有者・地域資源）。この一連の関係性によって成立してきた紙・パルプ産業であるが、各段階での森林のとらえ方や関わり方は大きく異なっており、その関係性は歴史とともに変化してきた。

そこで本章では、戦前から戦後に至る紙・パルプ産業の原料調達戦略の最前線に立ってきた王子製紙副社長、森林総合対策協議会理事長の小林準一郎（1887-1980）と王子製紙の専属請負人

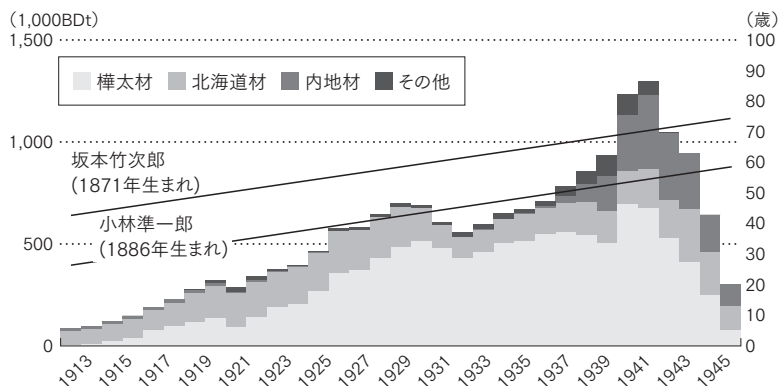


図5-1 戦前(1913-1945年)の紙・パルプ産業の原料調達動向と小林準一郎、坂本竹次郎の年齢
注：元資料の単位は石であったため、1石=0.180391m³換算したうえで、1BDt(絶対トン)=2.2m³(針葉樹)として単位を表示した。
出所：王子製紙山林事業史編集委員会編 [1976: 548-549]を参照し、筆者作成。

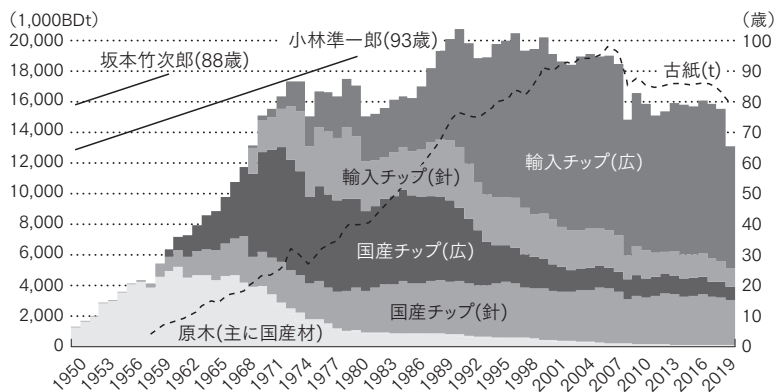


図5-2 戦後(1950-2020年)の紙・パルプ産業の原料調達動向と小林準一郎、坂本竹次郎の年齢
出所：早船 [2021: 29]を参照し、筆者作成。
元データは、経済産業省「生産動態統計年報 紙・印刷・プラスチック製品・ゴム製品統計編」(旧紙・印刷・プラスチック製品・ゴム製品統計年報、旧紙・パルプ統計年報)を参照。

として現場作業を担ってきた坂本木材の坂本竹次郎（1871-1960）の生涯に着目し、伝記等の史料をライフコース分析の視点から再解釈することで、森林資源を基盤とした産業と地域の持続性をとらえ直してみたい。

2 王子製紙山林部・小林準一郎

◎ 林学から王子製紙への就職 [葉袋編 1981: 30-34]

小林準一郎は一八八六（明治一九）年に群馬県に生まれた。小林が林学を認識したのは中学生（旧制前橋中学校、現群馬県立前橋高校）頃であり、最初の動機は新聞で読んだ大学農学部林学科の学生が書いた修学旅行の記事だった。そこにはドイツかオーストリアの砂防工学の教授の講義が載っており、林学の存在に興味を持つようになった。さらに、前橋中学校の校長が札幌農学校を卒業した人で、林学というものがその公的な性格、水資源の培養、その他いろいろな点から非常に意義あるものだとということを知り、林学志望を決意した。一九〇七（明治四〇）年に岡山の旧制第六高等学校（現岡山大学の前身校の一つ）を出て、東京帝国大学農科大学林学科（現東京大学農学部）に入学したが（写真5-1）、入ってみると学問らしくないと感じて興味を失ってしまい、他の学科に移ろうかなどとぐずぐずしているうちに卒業となってしまった。

同級生は全部で二四人いたが、二〇人くらいは国有林や御料林などに就職する時代であった。

小林は官庁へ行く気がまっただけだったので民間企業を志望したが、求人王子製紙からしかなく、そんなことで王子製紙に入社した。当時の王子製紙は、のちに社長となり王子製紙を大きく展開させた藤原銀次郎^{〔1〕}が入社する前であり（小林の入社した翌年に藤原が主事としてやってきた）、藤原が「聞きしにまさるボロ会社だった」と述懐する状況であったが、そんなことは学生であった小林は知るよしもなかった。むしろ苦小牧^{とまこまい}に大工場を建設していることに魅力を感じていた。

◎ 北海道の山林開発 [葉袋編 1981: 35-65]

小林は一九一〇（明治四三）年に大学を卒業すると北海道へ渡った。郷里の前橋では大変なところへ行くような話をされていたという。しかし、明治末年には未開だ、辺鄙^{へんび}だといわれていた苦小牧では（王子製紙の工場ができる前は人家が五〜一〇軒しかない寂しい漁村）、水力発電による電気や工場の蒸気を利用した熱湯もふんだんに使え、ランプを主に使用していた他地域に比べても恵まれた環境が整っていた。



写真5-1 小林準一郎
東京帝国大学農科大学の頃
出所：葉袋編 [1981: 2]

苦小牧工場の山林係に着任すると流送材の対応に追われた。当時の北海道では川の流域ごとに伐採が行われ、伐採木は川から流送され、それを下流に設置した網羽^{あば}（浮きをつけた網。網場^{あばば}）で受け止めるという方式がとられていた。大水になると網羽はしばしば決壊し、流失木を探して苦小牧から室蘭までの海岸を歩いて三、四日かけて調査することもあった。その後、小林は沙

開発輸入を推進した。ここで小林は机上の択伐論でなく、当時の最新技術であった航空写真調査に基づく伐採と商業主義による乱伐の抑制を提唱していたが、各地域で異常な過伐が進むこととなり、今度はブレーキをかける側になってしまったと慨嘆することとなった〔葉袋編1981: 212-213〕。結果として、日本の紙・パルプ産業は海外の天然林伐採を経た後、資源の循環利用を指向した海外産業植林地の形成および早生広葉樹チップの輸入に至っている。

小林は戦前に活力ある林業経営を指向する大規模山林所有者らと中央林業懇話会（のちの林業経営者協会）を設立し、戦後は集積した林地の重要性を唱え、企業的な経営につながる基礎条件の整備を訴えた。また、小林は国有林の合理的な経営のための公社化論を展開するなど、各種団体を通じて企業および学識者とも連携をとりながら森林資源の持続的な利用を常に勘案していた。

◎ 未来へつなぐ知識

小林の晩年の仕事として「林業文献センター」の設立がある。小林は林業・林産業の文献・資料が散逸してしまうのは惜しいと考え、『王子製紙山林事業史』の執筆に関わってもらった鈴木尚夫（筑波大学教授）と萩野敏雄（林政総合調査研究所）と相談し、私費と旧王子系製紙企業の寄付を投じて一九七七年に島田錦蔵（東京大学名誉教授）を会長とした「林業文献センター」を設立した。その後、一九八一年に林政総合調査研究所の付属特別事業として名称を「小林記念林業文献センター」に変更し、一九八六年からその収蔵文献と運営は大日本山林会に引き継がれて現在に至っている〔葉袋編1981: 174-178〕。

小林は一九八〇年五月に九三歳という長寿を全うした。葬儀は王子製紙山林部の後輩でもあった田中文雄（王子製紙社長）を葬儀委員長として旧王子系四社の合同葬によって行われ、小林と入社当時から友である加藤藤太郎（元神崎製紙社長）によるお別れの言葉によって締めくくられた。小林の人生はまさに王子製紙、紙・パルプ産業の拡大とともにあり、時代の要請と小林個人の影響は明確には判別しがたいが、現在の紙・パルプ産業のあり方と方向性に少なからぬ影響を与えた人物であろう。

3 坂本木材・坂本竹次郎

◎ 渡道と袖夫としての独立〔創業100周年記念実行委員会編1995: 3-5〕



写真5-2 坂本竹次郎
出所：創業100周年記念実行委員会編
〔1995: 155〕

坂本竹次郎は一八七一（明治四）年に石川県江沼郡那谷村（現小松原市）字滝ヶ原タ四番甲地三ツ屋坂本家の四男として生まれた（写真5-2）。家はいわゆる水呑み百姓であり生活はまことに苦しかった。そのため、一六歳で郷里をあとにし、一八九〇年には先に北海道に渡っていた兄を頼りに渡道した。このとき、坂本は数え年で二〇歳であった。当時の北海道は人口三六万人ほどであったが、移民の受け入れを積極的に行っている時期であり、農民を中心にその数は急増していた。

坂本は兄の與左門よさもんのところを身を寄せ、その年の冬から杵夫きぶ（木こり、北海道では「やまご」と呼ばれた）として千歳御料林の伐採に従事するようになった。頑強な体と実直な性格を買われ、石狩地区の造材業、渡辺彦太郎のもとで鉞まさかりを振るい、山に寝、雪に臥す難苦を乗り越え、「百石杵夫（百石やまご）」の異名をとどろかせた。

それまでの働きぶりが信用となり、一八九五年には独立して札幌市内に坂本造材部を創業した。この時期は日清戦後の熱気もあり、北海道でもさまざまな新会社設立されていた。創業当初の坂本造材部は一人親的な零細企業であった。そのため、高利な事業資金のやり繰りに苦労したが、千歳御料林での伐採事業を手始めに、空知川そらちがわの流送事業、三井物産の造材下請けなどに携わり、着実に実績を積んでいった。一八九八年に石狩川、夕張川、空知川は未曾有の豪雨によって氾濫し、空知管内で一〇四人の死者を出すという惨事が起きたが、坂本はかろうじて難を逃れた。

坂本は一八九九年に二八歳で石狩郡当別村とうべつむらの長岡トヨと結婚し、北海道に骨を埋める決意を堅くした。一九〇四年には日露戦争を契機として、北海道でも多くの企業が設立され、そのうちの一つに富士製紙の進出があった。坂本は三井物産の請負とともに富士製紙の請負も行い（富士製紙との請負関係は空知川の流送が終わる一九二四年まで続いている）、上川かみかわ、空知、石狩へと徐々に業容を拡大していった。他方で、事業拡大を図っている時期に坂本は中国山東省に木材輸出を企てたが失敗、それまで吸っていた煙草をやめ、その煙草代を毎日の積み立てとすることを決意したという。なお、渡航での留守中の事業を差配し、後日の下地をつくったのは賢妻の誉れ高いトヨの

力であったとされる。

◎王子製紙専属請負業者としての躍進「創業100周年記念実行委員会編 1995: 8-10」

王子製紙苦小牧工場は一九一〇年に開業を控え、パルプの原料である木材の伐出請負人の選定に苦慮していた。というのも一獲千金の巨利を狙う者がはびこるなか、実力と信用のおける人物を見つけるには慎重にならざるをえなかった。そんななか、当時の王子製紙山林掛長だった水島鉉四郎の目にとまったのが坂本竹次郎であった。直接の面識はなかったが、事業を通じてその仕事ぶり、強靱な体力と精力を持った無骨な男であるという人となり水島の耳に入っていた。後

日、水島は札幌の山形屋旅館に坂本を呼び、世間話をしながらその人物を観察した。この一度の面談で、水島は「この男ならば困難を克服し必ず仕事を成し遂げる」と坂本に惚れ込み、即座に専属請負人として決定したとされる。ここに王子製紙専属請負業者としての坂本木材一〇〇年の歴史が始まった（写真5-1-3）。

本格的な伐出事業は一九〇八年に漁



写真5-3 坂本木材部の印裨纏
出所：創業100周年記念実行委員会編 [1995: 104]

それを持続的なものとして地域経済内に位置づけるには、需要者（木材産業）と供給者（所有者あるいは山林事業者など）のあり方を改めて問い直す必要があるだろう。

註

(1) 藤原銀次郎は、山林関連では三井物産木材部長時代に欧州への北海道材輸出を開拓し、その後、王子製紙の隆盛を指導した。そのため、晩年には「私は北海道で山を荒らした。これまでは全く、樹を伐ることばかり考えて、山をつくることを考えなかった。それではいけない。晩年の私のする仕事は、北海道の山をなおしたいということで、これは終生の願いである」と述べたとされ「桑原 1961: 215」、造林への思いは強かった。王子製紙時代の造林の推進については、藤原が山林経営について指導性を強く発揮し、小林が林業技術に全責任を持って進めた。

(2) 小林林業所は一九四八年に設立され、王子系列や納材業者の協力もありパルプ材集荷業を主として事業を展開した。一九五五年頃には事業地は北海道、北陸、近畿、中国、四国、九州で常時五〇か所に及び、従業員二〇〇名を抱える全国的な組織に拡張されたが、一九六〇年代には縮小を余儀なくされ、業態を縮小して継続されていたが、二〇二一年には保持していた社有林を占冠村に寄贈し、解散するに至った【葉袋編 1981: 199-203, 259-261】。

(3) アラスカの資源については、一九二〇年の北米出張時から小林の胸にあり、戦後、GHQ天然資源局林業部長ドナルドソン中佐に打診したことをきっかけとして、関連業界の共同出資によって一九五三年にアラスカパルプが設立され、パルプの生産・輸出が取り組まれた【大島 1969】。しかし、一九八〇年代にはパルプ市況の悪化、米国の環境保護運動の高まりもあり、一九九三年には事実上の廃業状態となり、二〇〇四年に解散が決議された。

第6章

赤井学校の時代

——ある地方大学にみる
国産材供給整備の源流



奥山洋一郎

1 学問をつなぐもの

鹿児島大学キャンパスの一角に少し大きな石碑がある。鹿児島大学林政学研究室の教授だった川島明八あけはちの顕彰碑である（写真6-1）。キャンパス内には個人を顕彰する石碑は多くはない。どういった経緯で建立されたのかは不明であるが、新しく赴任した大学で自分の専門分野と関わりの深い碑を目にするのは、新天地での漠然とした不安を軽くしてくれた。実は川島明八は本章での論考の対象ではないのだが、新しい土地で自分の足場の築き方を模索するなかで、研究室、研究分野というコミュニティが持つ意味を考える契機の一つとなった。鹿児島大学に赴任後のある日、年輩の卒業生と話していたときに「赤井英夫先生のいた頃は国家公務員一種試験に毎年合格していて、林野庁の中でも『赤井学校』と呼ばれるくらいの人数がいた」と教えられた。この「赤井学校」というある種の郷愁を誘う響きが印象的で、長く自分の心に残る言葉となった。本章では、鹿児島大学林政学研究室からある



写真6-1 川島明八記念碑
出所：筆者撮影

期間、国家公務員試験上級職・一種試験合格者が継続して誕生していた事実に着目して、大学の研究室というコミュニティの中でどのような学びがあったのか、卒業後にキャリアを積むなかで大学での学びが個人の経歴ないしは森林管理の制度に与えた影響を計測する、という目標を設定した。この試みが成就したかどうか、それは読者の評価に委ねたいが、林政という限られた政策空間の中で何らかの痕跡を見いだすことができたら、と考えた。もう一点、本章では国家公務員（上級職）試験合格者に限定した取り扱いをしている。大学卒業者の進路選択の中で、国家公務員試験合格はある種の羨望を持たれるケースが多かったとしても、それがすべてに優先する到達点ではない。この点を認識したうえで、国家公務員の人事運用の中で（法律の根拠がなくても）、この区分の試験合格者が昇進上特別な扱いをされて、政策の考案、実行において責任ある立場となる可能性を有するからである「大森2006」。本章では南国の地方大学の師弟二人を主人公にして、教員と学生の出会いが何を生み出したのか、学問がどのように継承されて政策形成に影響したのかをみていきたい。

2 赤井英夫の京都・島根・東京時代

本章の主人公の一人、赤井英夫（1927-2018）は鹿児島大学林政学研究室の元教授である（在任期間一九七二―一九九一年）。以下、赤井の回想文「赤井2006」と卒業生への聞き取りからその歩みを再現したい。



写真6-2 赤井英夫(1975年頃)
所蔵・提供：中原保久氏

て、一九五〇年に大学卒業と同時に農林経済学科林政学講座に助手として採用された。講座の助手に採用されて生活の安定を得たが、同時に迷いが生じて、下宿の仲間に影響されて哲学の大学院に入り直そうと考えたこともあった。大学受験時に科目数の少なさから農林経済学科を選んだため、森林・林業の政策研究が一生涯の仕事かどうか疑問を持ってしまったとのことである。

一九五三年に島根農科大学(現島根大学生物資源科学部)に講師として赴任する。島根での生活は安定しており、一番穏やかで楽しい時間だったとのことである。助教教授に昇進して、教授の座

赤井英夫(写真6-2)は一九二七年千葉県生まれで、旧制中学で一年学んだのちに陸軍幼年学校、陸軍士官学校に進学した。この陸幼・陸士での経験が後述する大学教員としてのあり方に影響を与えている。戦局が厳しいなかでの訓練生活だったが、陸士本科在籍中に一九四五年の敗戦を迎える。家族の住む宇都宮に帰郷後、陸士在籍者が特例で大学受験可能ということで、京都大学農学部農林経済学科を受験して合格した。このとき、陸士・海軍兵学校出身者が三割を占めていたとのことである。京都で学資を稼ぐアルバイトに励みすぎて体を壊し、一年休学して地元の栃木県森林組合連合会で嘱託として勤務する経験もしている。復学後は研究の面白さに目覚め

も約束されていたのだが、一九六一年に東京に新しく設立された財団法人林業経営研究所(のちに林政総合調査研究所、解散後に林業経済研究所に統合)に移籍する。公立大学の安定した職から財団法人の研究所に移ることは冒険であったと思われるが、研究に関する立地の制約を解消したい思いがあった。当時は社会科学系の分野では中央行政機関があり、情報が集中している東京との距離が研究の障害となっていた。財団法人林業経営研究所は「国有林のシンクタンク」として創設された法人で、当然のことながら中央官庁との結びつきは強く、充実した研究生活を送ることとなった。林業経営研究所在職中に博士号を取得して、林学賞(日本林学会)も受賞している。多忙な中での博士論文執筆を支えたのは、陸士本科での心身の限界を試す過酷な訓練経験であった。これまで縁のない土地であったが、島根から異動したときよりも東京と地方の情報格差は埋まりつつあったこと、九州は林業が盛んで研究の場として魅力的であったことで、最終的には林業経営研究所の労働争議があり、職場の研究環境の将来性に不安を抱いたことで新天地への異動を決意したとのことであった。

3 赤井の鹿児島大学赴任

鹿児島赴任後、当初の一一年半は単身赴任であった。陸幼・陸士での生活経験があったので、掃除・炊事・洗濯は苦にできなかった。鹿児島大学には定年退職を迎える一九九二年まで在職する

第7章

森林管理の 当事者性と専門性

— 林政の変遷と

天竜・富士南麓にみる地域実践

志賀和人



を高める、専門知識の尊重)が日々のオペレーションから意識できているかによるとされる。林業や森林管理は、それが失敗かどうかの評価がすぐには把握しづらい分野であるだけに、高信頼性組織とは対極にある組織が生み出す「当面は顕在化しない失敗」の連鎖から、自らの地域や経営の破局を回避する英知が必要となる。

2 日本林政の展開と官僚組織

日本の森林所有と林務組織のあり方は、明治期以来の土地・地方自治制度や林政の展開過程を通じて、大きな影響を受け、その地域対応の多様性と歴史的経路依存性が現状を規定している。以下、日本林政の展開過程と官僚組織の関与を主要な森林法制に即して概観しておこう。

◎森林法制の構築と山林局の体制変化

日本の森林法は、一八八二(明治一五)年の森林法草案が廃案となり、制定作業が頓挫していたが、一八九四年に高橋琢也が森林法調査委員を命じられ、一八九七(明治三〇)年に日本最初の森林法が成立した。高橋は一八九五年五月から一八九七年八月まで山林局長を務め、村田重治(林政課長)とともに同法制定に尽力した。

高橋は一八四七年に広島島の牛田村に生まれ、大阪の薬種問屋での奉公の後、一八六八年に船越衛(安芸藩士、江戸府判事、兵部大丞)を頼り上京し、開成学校でドイツ語を学び、大学南校で外国

語文献の翻訳に従事した〔伊東2011:59-63〕。陸軍省でドイツ語の能力を評価され、ドイツ軍制の導入に貢献したが、武井守正山林局長の求めに応じて西周が高橋を推挙し、一八八五年に山林局に転任した。山林局では大小林区官制の策定に尽力し、青森、高知大林区署長を務めた〔長池1978a〕。高橋の山林局長退任後、一八九九年の文官任用令改正により勅任官の任用が在職者に限られたことから、在野の山林局長が就任する途はこれ以降、閉ざされた。

村田は一八六一年金沢に生まれ、石川県の雇員を経て、東京農林学校林学科を卒業、一八八八年に農商務省山林局判任官見習となる。愛媛、宮城、熊本大林区署長や山林局林務課長、林政課長、調査課長、経営課長、地方課長を務め、一九〇七(明治四〇)年森林法改正や国有林野法の制定、国有林野特別経営事業の創設に貢献した〔窪田1962〕。国有林経営の基礎を築いた特別経営事業は、村田が三〇歳のときに日本経済会懸賞論文一等を受賞した「日本森林経済論」がもとになっているといわれる。村田は一九四二年に八二歳で没するまで東京市水道水源林や鴨緑江採木公司、住友合名会社の社有林管理にも貢献している。

一九〇七年の森林法改正は、久米金弥山林局長と松波秀實、村田重治らにより公有林・社寺有林の施業案監督と森林組合制度の創設が行われる。それと同時に特別経営事業を二七年間担った松波課長が退官した。これをのちに、第二次世界大戦期に山林局技官の最高ポストといわれた作業課長、林産課長を務め、当時の技術者運動の中核組織の興林会常務理事を務めた太田勇治郎は、「わが国林政の創建期は国有林特別経営事業の終了、公有林野官行造林制度の開始で終了したわけだが、……ここで林区署制までも変革されるに至った。この改革のもつ意義は極めて大きい。

る森林組合にあって、篤林家が地域と林業地の危機に立ち向かった最後の輝きでもあった。

◎「ある山村の革命」の個人が背負いきれない当事者性

龍山村森林組合の青山宏組合長は、一九六二年に三六歳で同組合の常務理事に就任し、一九八七年に組合長を退任するまでの二五年間で全国有数の森林組合に発展させた。後日、その心境を述べるなかで、五代前の先祖が天竜で木材商を営む青山家から四兩二分の年貢が払えないため、持山を三五年間の年季で差し出し、借金した際の証文を額に入れて家に掲げ、「私で一代目になります。今日、自分の家が何とかその日その日を過ぎしているのは、代々の人たちのそういう厳しい条件下での営々辛苦の賜物だ」（報告は一九八八年時点）と、折に触れ子や孫に語っていると述べていたのが印象に残る〔青山1994: 16-18〕。

龍山村森林組合と青山宏組合長の一九七〇年代までの業績は、青山宏著『ある山村の革命——龍山村森林組合の記録』〔青山1996〕に詳しい。一九七七年度の視察者は一一四件一五一六人に上り、林業・森林組合関係者だけでなく、協同組合関係者から労働者生産協同組合の先駆として注目された。とくに一村単位の正組合員八〇〇人、地区内森林面積四八〇〇ヘクタールに満たない森林組合が、苗木から住宅産業までの林業分野の垂直的統合と組合員世帯員を含めた就労機会の拡大により、一時的ではあるが過疎化を食い止め、作業班の労働条件・福祉対策の改善と新規就労者の育成・教育体制を構築した点が注目された。組合長退任のいきさつは、現場作業班員の労働条件改善への村単独補助予算の削減をめぐり村長と対立し、村長選に出馬した際に組合員に

支出した素材生産事業の前渡金が選挙違反とみなされたことが原因と聞いている。青山組合長の退任後は、二人三脚で実務を担ってきた佐藤明参事が常務理事に就任し、同組合を支えた。

二〇〇五年の市町村合併を契機に龍山村は浜松市に編入された。浜松市では森林・林業ビジョン検討委員会を組織し、同ビジョンと森林認証の取得方針が決定された。天竜林材業振興協議会のFSCグループ認証は、市内六森林組合と市有林、県営林、国有林の四・九万ヘクタールから構成され、浜松市林業振興課が事務局を担当している。とくに天竜森林組合と龍山森林組合がサイト管理者を務める天竜・龍山サイトの認証面積率は九〇%を超え、グループ全体の素材生産量は間伐材を主体に年間五・五万立方メートルが生産されている。また、市内のCOC認証取得五グループ六四事業体と連携し、二〇二一年度の森林環境譲与税事業二・六億円のうち、八〇〇万円がFSC認証材振興に充当されている。

◎市町村合併・山村振興への首長の独自路線

市町村長と森林組合長を兼任する首長には、森林組合と市町村の関係重視した第三セクター的展開を推奨する見解が多い〔黒澤2001: 榛村1990〕。これらの地域では、平成の大合併に背を向けて独自の山村振興を貫き、林業の成長産業化にも一定の距離を置き、地域資源の循環とセクター間協働によって、その輝きを増した地域がある。

北海道下川町しもかわちょうの原田四郎町長は、下川町の林務課長、森林組合参事の実務経験が長く、一九八三年から一九九九年の四期一六年間にわたり町長を務め、森林未来都市構築への基礎を築いた

終章

森林と人の関係を
紡ぎ直し続けるために

山本伸幸



1 本書の方法論的位置

◎森林科学研究の潮流における位置

本書を締めくくるにあたり、今回の試みがこれまでの学術的方法論に対してどのような意味を持つのかについて、まずは手探りしてみたい。そのあとで、最後に本書全体の若干の考察をして、まとめとする。

本書の九人の執筆者はいずれも林業経済学、林政学、森林政策学という森林科学（林学）の中で人文・社会科学を専門とする研究者である。社会全体から見ると、かなりマイナーな部類の私たちの研究分野であるが、それでも、帝国大学農科大学林学科第三講座として一八九〇（明治二二）年に日本で初めて林政学研究室が誕生して、すでに一三〇年以上の歴史があり、また、本書の著者全員が属する林業経済学会が一九五五年に設立されてからまもなく七〇周年を迎える。

本書のキーワードである森林、地域、社会はいずれも、私たちの研究分野にとつてずっと問題関心の中心であったし、これからもあり続けるだろう。だから、副題とはいえ、「森をめぐる地域の社会史」などという大風呂敷の書名は厚顔無恥の誹りを免れない暴挙ともいえる。私たちの分野の研究者には、ほとんど手垢まみれの、新味のない、それでいて、いざ掲げるとなるとためらわざるをえない、そのようなタイトルを改めて正面に見据えての悪戦苦闘の結果が本書である。

岨道のわずかな手がかりは、個人一人ひとりの生と社会全体の歴史につながりを見いだそうとする歴史社会学のライフコース分析である。もちろん、改めて述べるまでもなく、従来の林政学や林業経済学においても、歴史学ないし歴史的視点は重要な方法論の一つであった〔林業経済学会編2006〕。

しかしながら、制度史学や経済史学の方法だと、多くの場合、マクロな視点に軸足を置き、地域の多くの事象は誤差や残余として扱われやすい。一方で、近世の林業史でとくに多くの成果を生み出してきた実証史学では、その実証性を担保する資料の制約から、広域でのトータルな地域把握が困難な場合も多々ある。もちろん、これらの各方法は今後も引き続き重要であることは間違いないが、ライフコース分析という視角によって、そこに新たな方法をもう一つ付け加えられるのではないかと考えている。

これまでも、個人の生と森林、地域の豊かな関係を描いた試みがなかったわけではない。一つは、林業家、産業者、官僚などが自身の道のりを記述した自伝である。自伝は時に客観性を欠くが、当事者がどのように生きたか、あるいは、当事者がどのように生きたと後世に伝えたいと考えたかを記した貴重な史料であり、ライフコース分析からの再解釈は重要な取り組みである。

もう一つは、自身も森林技術官僚であった手束平三郎の書いた『森のきた道』〔手束 1989〕という稀有な作品である。この著作では、明治期からアジア・太平洋戦争敗戦直後までの山林局、御料林を中心とした国の森林政策について、史実をもとに、時に創作を交えて、全三三話の物語が描かれている。大学卒業後、一九四〇年に戦時下の山林局で手束は官僚としてのキャリアを開

三層にさらに森林の時間を加えた四層の時間についての相互関係を模索した。その際、ライフコース分析の視角は、個人の時間について知見を加えるものと考ええる。

経済学に視線を移せば、経済変動についての膨大な研究蓄積がある。短期から長期に並べると、①在庫投資周期であるキチンの波、②企業設備投資周期であるジューグラーの波、③建物投資周期であるクズネッツの波、④技術革新周期であるコンドラチエフの波が有名である。米国の社会学者、経済史家であるイマニエル・ウォーラステインは、ブローデルの枠組みを発展継承し、壮大な世界システム論を構築したが、とくに長期のコンドラチエフの波を、世界システムの変更と関連させて論じた「ウォーラステイン編 1992」。

経済変動は私たちになじみ深いのが、社会に変化をもたらす要因はそれだけに限らない。ライフコース分析が着目する人の生死による社会変動は、これまでの経済変動とは異なる社会変動のあることを私たちに教えるものでもある。森林と地域社会の関係を照準する本書において、そのことはいっそう鮮明に気づかされるであろう。

2 森林と人の関係の継承

七つの章では、さまざまな角度から森林と地域社会の関係を描き出した。本書を手にとった方の中には、森林と地域社会を冠した書名から連想したものとはずいぶん違う内容だったと、ひとつとしたら感じた方もいらっしゃるかもしれない。编者としては、その期待の外れ方が、良い

方向であればと願うばかりである。

本書の各章で取り上げた地域や時代、対象とした時間の長短はまちまちだが、いずれの章でも共通したテーマとして、世代を超えた人、社会と森林の関係の継承の問題は重要な関心事であった。森林と地域社会の関係は多様、多層であり、一筋縄にはいかない。とくに、本書が主題とした近現代においては、世界は日々目まぐるしく変転し、この困難さがひとしおであることは、いずれの章の記述からも一目瞭然である。

瞬く間に変化する近現代社会は、ゆっくりと時を刻む森林さえも放っておかない。当分の間、変わることなく続くかに思える、一つの時代に卓越した森林の利用や所有の形態も、少し視線を引いて長い歴史の中に置き直せば、いずれもつかの間のことに思える。かつての営みを知る人も明日にはもう、この世界からいなくなっているかもしれない。

それでも、地域社会で暮らす人びとの横には、昔と変わらずに同じ山がある。「その森林が地域の山であるという事実」[三木 2023]を地域で暮らす人びとが信じ、そうした気持ちを抱き続けられるならば、世代を超えた森林と人、社会の関係の継承を支える手がかりとなるだろう^③。

各章でこの手がかりにあたるものは、それぞれ何であつたらうか。

第1章では、林学者としての島崎の実践が、山林塾を通して多くの人びとに共有されていく過程を見た。第2章では、目まぐるしく変化する時代の中で、山村社会において活動の場を広げ生きる女性たちの柔軟さと強靭さを発見した。第3章では、昭和初期から続く用水管理のための集落財政の仕組みである「割元」が、集落住民間の公平性への信頼の基盤であつた。第4章では、

阿武隈山地の豊かな森が継承の手がかりであり、だからこそ原発災害の放射線が継承にいかにか大きな困難を与えているかを述べた。第5章では、紙パルプ産業と地域社会との関係を見つめることで、経済と社会相互の持続性が一筋縄ではいかないことがわかった。第6章では、鹿児島大学の教員と学生の交流が、大学と社会をつなぐ契機となる可能性が示された。第7章では、具体的な生活世界を背景に、時に葛藤しつつ生きる、人びとの地域に対する当事者性が将来への希望であった。

本書のわずか七つの例からだけでも、地域社会と森林の関係の継承には、さまざまな契機があることがわかる。それぞれの地域の培ってきた固有の歴史とその歴史を礎石としていまを生きる人びとによって、継承の契機は絶えず形を変えながら、そこにある。

時間は刻み続ける。黙々と刻み続ける時間は残酷だが、一方で、時にそれは癒しでもあり、希望でもある。少し前には考えもなかった継承への可能性が、明日には、すぐそこに手の届く将来のものとして描けるかもしれない。

3 森林の歴史

本書ではプロードルの三層の歴史にもう一層、森林の歴史を加え、四層の歴史、時間の関係性を考えてきた。改めて、各章を振り返りながら、森林の時間と人、社会の時間について、もう少し考えてみたい。図序1の樹木の成長を表した破線の意味についてである。

土地に働きかける人の営みを「農林業」とひとくくりにすることが多く、林業のことをよく知る人びとを除けば、農業と林業では産物の収穫の概念が大きく異なることは、意外と気づかれていない。農産物では多くの場合、利用可能な時期に達したら、あまり長い期間、農地に置いたままにはせず（というよりも、そのまま放置すると傷んでしまい、人の利用には適さなくなるので）、収穫する。

一方、木材生産の場合、収穫時期にはかなり幅があり、燃材のように短伐期で収穫することもあれば、直径の太い大丸太を得るため、長伐期で収穫することもある。また、収穫頻度についても、農産物では米や多くの野菜のように毎年、あるいは年に何度か収穫するものも多いが、木材生産は造林から伐採するまで、燃材のような短いものでも数年はかかり、とくに建築用ならば、細い材でも日本の場合、三〇〜四〇年は必要である。

このように、木材生産には長期の時間を要し、目まぐるしく変化する現代社会との間合いがなかなか合わない。長期の育成期間を克服するため、育種などの技術を用いて林木の成長を短くしようという試みも、これまで何度か行われてきたが、数少ない成功例を除けば、多くの場合、実用にはまだまだ時間がかかりそうである。スギ、ヒノキ、カラマツ、トドマツといった日本における主要な造林樹種の成長には、いずれも数十年の時間が不可欠である。そして、このようにゆっくりと成長する森林の樹齢に合わせ、森林を取り巻く人や社会もまた少しずつ変化する。

アジア・太平洋戦争の敗戦後、荒廃した山への復興造林を一〇年間という短期間で完了し、高度経済成長の高まる木材需要に応え、国は一九五〇年代後半から三〇年ほどの間、いわゆる拡大

- (1) 森林、林業に関係した多くの官僚、産業人の伝記や日記、あるいは、集落の暮らしをまとめた文集などもここに含まれよう。例えば、林業経済研究所編「1971,1972」¹⁾、早尾「1963」を参照。
- (2) 萩野「1987」から萩野「2012」に至るまでの六冊がある。
- (3) 三木「2023」は、近世から地域に伝承されてきた山林絵図にその手がかりを見いだす。
- (4) 山本「2008」参照。こうした共同体への志向が排外主義に容易に回収される現実を鑑みるに、このことは森林と地域の関係だけにとどまらず、現代日本社会における現在進行形の重要な課題といえる〔山本2024〕。

編者あとがき

本書のタイトル決めは難航した。「森林と時間——森をめぐる地域の社会史」に対して、もう一つの有力案は出版社の担当編集者に挙げていただいた「森の時間 人の時間——森林と地域の社会史」であった。

三〇年ほど前の中公新書のベストセラーを想起する読者もいらつしやるかもしれない。編者がまず思い出したのは、二〇一〇年に当時在籍していた森林総合研究所関西支所で企画した一般公開シンポジウムのタイトル「森林の時間 社会の時間」で、そんなこともあって、こちらの案もかなり魅力的だった。

一方、「森林と時間」には人が欠落している。副タイトルの地域や社会史の言葉で補える可能性はあるものの、生態学がテーマの本と誤解されたりしないか。本書の他の著者からの一理ある意見もあつたりして、かなり心がぐらついた。

このタイトルを編者が思いついたのは、旅先の名古屋のビジネスホテルだった。真夜中にうっかり起きたが最後、目が冴えてしまい、とりとめもない、あれやこれやを考えていたときのことだ。悪くはないタイトルじゃないかと思つた矢先、すぐにハイデガーの『存在と時間』が頭をかすめた。もちろん直接の関係はたぶん、まったくないのだけれど、ザクセンの鉱山役人であつた

カルロヴィッツが書いた一八世紀の著作に淵源を持つ森林科学であれば、バーデン出身のハイデガーとの関連を熟考もせずに、こんなたいそうなタイトルを掲げてよいものと悩んだ。真夜中ゆえの迷走である。

その後、あれこれと考えてみたものの、最終的には、やはり主タイトルは簡潔にしたいとの編者のわがままを押し通した。それに、改めて国会図書館のデータベースなどを調べてみると、意外にも『森林と時間』を冠したタイトルの書籍はこれまで一冊たりとも出版されていないようである。それもなかなかではないかと独りごちたりした。だから、内心ひやひやものであるが、いまは一人でも多くの読者にこの本が届けばよいと思う。

本書は科学研究費助成事業基盤研究(B)「世代間継承を折り込んだ地域森林管理方策の解明——ライフコース分析の応用——」(J19H04344)の研究成果で、この科研のメンバー全員が本書の著者である。なかなか科研に通らない編者としては珍しく一発で採択された研究プロジェクトだった。応募当初から参画メンバーには、あれこれ細かなことは言わないがプロジェクトの最後に本を出すので、その著者となつてほしいと口説き、了解を得た。だから、科研メンバーを一人も欠くことなく、出版までたどり着けたことは率直に嬉しい。

この頃はあまり多くは見かけなくなつたやり方だが、ライフコースをテーマとした本書らしく、巻末の執筆者紹介に生年を入れることとした。世代もまちまちの著者九人のライフコースにとつて、濃淡はあれど、本書は何らかの烙印を穿つものである。これからの著者それぞれのライフ

コースに、本書がどのように影響を及ぼすことになるかという点も編者としては興味がある。

本書のアイデアの核であるライフコース分析は、編者が二〇一六年林業経済学会春季大会シンポジウム報告を通じて、森林科学研究に持ち込んだものだ。虚実^な交ぜ^まだが、当事者ならではの迫力を持つ自伝を読むのが好きで、森林や林業関連の自伝的著作をばらばら蒐集していた。自然資源管理というシンポ全体のテーマの中で、蔵書の自伝も用いて、森林テクノクラートにテーマを絞ろうと思いついたものの、なかなかまとまらず、なかば苦し紛れに見つけ出した方法論だった。

シンポを終えてみると、関心を持つてくださる方もちらほらおり、私自身もこの方法の可能性を感じた。とはいえ、私一人の幅^たとおのずと限界がある。そこで、多様な視点からこの方法の拡張ができるように、関心のありそうな研究者仲間^らに声をかけた。各章に並んだタイトルを見ると、この目論見はそこそこ当たつたのではないかと手前味噌ながら思っている。あとは読んでくださった皆さんの評価を待ちたい。

森林を思索することとはすなわち、土地や地域、人など、一切合切ひっくるめて森林の時間や歴史について思索することだと考えている。森に分け入つて目にする樹木がこれまでに刻んできた時間に思いを馳せ、それと同時に人の世の移ろいやすさを憂うとき、やり場のない切なさのままに襲われる。森林の人文・社会科学的側面を探求している私たちの研究分野では、この何とも表現しようのない切なさの在りかを言語化しようともがいているところがあるような気がする。

少なくとも私はそうだ。

自然科学的あるいは工学的に森林を研究している人たちにとっても、やはり時間や歴史は避け通れない難題であろう。最近マスコミを賑わす低花粉スギを例にとれば、育種改良の苦心惨憺の末にやっと低花粉スギの苗木を産み出したものの、それらを植え、育て、きちんと成林するかの成否がわかるのは何十年も先のことだ。自分が生きているうちに結果まで見届けられる森林科学の成果はあまり多くない。

何十年という時間は、社会や経済、技術体系までを大きく変化させる。仮に当初の目論見通り成功したとしても、すでに世の中はその知見を必要としていないかもしれない。短期的に結果を得られる類の科学とは異なり、人文・社会科学、自然科学、工学的いずれの方法に依ったとしても、森林を考察する営みは時間や歴史を内包せざるをえない。

『森林と時間』というタイトルには、森林を考える際の、このような困難や切なさ、そしてそれでもなお、胸躍ってしまう気持ちを込めた。私たちは長くても一〇〇年前後の時間しか生きることでできない人であり、その私たちが集いつくる社会は移ろいやすい。そんな私たちとともに長い時間をかけて成長する森林と人、社会の関係は複雑さに充ち満ちている。本書を契機として、森林と時間についての思索がいつそう深まればと願う。

いずれの章も多くの方のご協力なくしては完成しなかった。それらの謝辞は各章の中で書かれているので、そちらに譲りたい。全体のまとめとしてのこの場では、謝辞として、新泉社編集部

の安喜健人さん（一九七二年生まれ）お一人の名前を挙げるにとどめる。

出版を検討するなかで、複数の知人から、真摯かつ職人技の編集者として安喜さんのお名前を聞いた。そこで本書の他の著者とも相談し、お願いの運びとなったわけだが、面識のない編者からのメールでの不躰なお願いに対し誠実な応答をいただき、最終的にお引き受けいただくこととなった。その後の手際の堅実さ、的確なアドバイスに、間違いない選択だったと確信している。安喜さんの伴走がなければ、本書はもっとならないものとなっていただろう。記して感謝したい。

二〇二四年初夏

山本伸幸